

長門寺遺跡・顔戸遺跡・高溝遺跡発掘調査報告書

—市道顔戸・八田羽織線道路改良工事に伴う発掘調査—

2024年3月

米原市教育委員会



## 例言

- 1 本書は、市道顔戸・八田羽織線道路改良工事に伴う長門寺遺跡・顔戸遺跡・高溝遺跡の発掘調査の報告書である。
- 2 調査は米原市建設課の依頼により、米原市教育委員会が実施した。調査の体制は下記のとおりである。

### 【令和元年度～2年度】

調査主体	米原市教育委員会	教育長	山本 太一
調査事務局	米原市教育委員会事務局	課長	桂田 峰男
	歴史文化財保護課	課長補佐	吉田 豊 (令和2年度より主席参事)
		主 幹	高橋 順之
		主 事	小野 航 (令和2年度より主任)
		主 事	石田 雄士 (令和2年度より主任)
		記録係	谷口 徹

### 【令和3年度～5年度】

調査主体	米原市教育委員会	教育長	馬淵 均
調査事務局	米原市教育委員会事務局	課長	梶田 悟 (令和3年度)
	生涯学習課	課長	平山 武史 (令和4～5年度)
		課長補佐	澤 恵子 (令和3年度)
		課長補佐	池田 百合 (令和4年度)
		課長補佐	中村 努 (令和4～5年度)
		主 幹	高橋 順之 (令和4年度より課長補佐、令和5年度より主席)
		主 任	小野 航
		主 任	石田 雄士
		主 事	滝本 時玄 (令和5年度)
		記録係	谷口 徹

調査補助員	植田 紘正 (元：滋賀県立大学大学院生、現：大分県立歴史博物館 研究員)
	真野 智詩 (元：滋賀県立大学 学生、現：川崎市役所 職員)
	岩崎 心人 (元：滋賀県立大学 学生、元：東栄町役場 職員)
	松原 草太 (元：滋賀県立大学 学生、現：静岡市文化財課 職員)
	滝本 時玄 (元：滋賀県立大学 学生、現：米原市生涯学習課 職員)
	幸田 朱加 (滋賀県立大学 学生)
	居藤 紗依、伊藤 良名煌、北村 麗愛、澁谷 峻、坂角 奈那 (米原市立米原中学校 生徒)
	杉野 美月、MIGUEL DE BARROS SATO (米原市立大東中学校 生徒)
	葛田 華実、杉山 あかり、時田 倫那 (米原市立双葉中学校 生徒)

発掘作業員	上野 敏明、太田 保、小川 道夫、門脇 俊夫、鹿取 利雄、川上 忠造、北沢 民夫、北野 和男
	北村 清、北村 茂樹、清水喜久司、竹中 健一、力石 寅次、戸田 弘司、中森 喜平、野一色義嗣
	能政 良昭、林 繁喜、林 登美子、福田みどり、前川 博貴、松浦 昌宏、丸本 安男、三輪 文子
	三輪 正光、宮西 憲幸、村居伊三美、吉田 省三、横川 孝道 (米原市シルバー人材センター)

- 3 本書をまとめるに当たって、下記の方々および団体・機関から指導、助言を得た。記して厚く感謝の意を表する次第である。
- 赤澤 徳明、市田まち子、伊藤 航貴、上野 典弘、大西 遼、大道 和人、奥田 達也、北原 治  
北森 宣子、小谷 徳彦、小林 裕季、佐藤 佑樹、柴田 慎平、嶋津 裕之、高居 芳美、中川 永  
山口 誠司、丸木 豊、丸山 竜平、宮崎 幹也、山下 優介（五十音順、敬称略）  
飯戸自治会、高溝自治会、米原市まち整備部建設課（五十音順）
- 4 重機掘削および発掘作業員の派遣は下記の団体に委託した。
- 上津建設・鏝田土建・株式会社杉山工務店（重機掘削）、米原市シルバー人材センター（作業員）
- 5 高溝遺跡から出土した種実遺体の種実同定および年代測定は、バリノ・サーヴェイ株式会社へ委託した。
- 6 本文中に記した標高は、東京湾平均海面値 (T.P) からのプラス値、単位はメートルである (T.P+の表記は省略)。
- 7 使用した測地系は世界測地系に基づき、平面直角座標系は第IV系、単位はメートルである。
- 8 本書で使用する方位は、座標北を基準とした。
- 9 土色は、農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』1994年版に準拠した。なお、土層名の記載は記号・土色・土質の順で表記した。
- 10 遺構番号は、遺構の種別を示す記号と遺跡ごとに付した一連の番号を組み合わせるにより標記する。なお、遺跡の種別を示す記号は、『発掘調査のてびき—集落遺跡発掘調査編—』(文化庁文化財部記念物課、2010年)に従い、下記の記号を使用する。
- SA (塀・柵・土塼)、SB (建物 [堅穴建物以外])、SC (竈)、SD (溝)、SE (井戸)、SF (道路)、  
SG (池)、SH (広場)、SI (堅穴建物)、SJ (土器埋没遺構)、SK (土坑・貯蔵穴・落とし穴)、  
SL (竇・カマド)、SM (盛り土・貝塚)、SN (水田・畑)、SP (柱穴・ピット)、SS (礎石・基石・配石)、  
ST (竈・埋設施設)、SU (遺物集積)、SW (石垣・防護壁)、SX (その他)、SY (窠)、  
SZ (古墳・墳丘墓・周溝墓)、NR (自然流路)
- 11 調査および遺構・遺物の写真撮影については、石田が担当した。
- 12 本書の執筆は、第2章を滝本、第3章第4節(3)を松原、第4章第4節2(3)を滝本・幸田、第5章第3節(2)および第5章第4節(3)を幸田、その他を石田が担当した。また、第6章はバリノ・サーヴェイ株式会社の分析結果を掲載したほか、第7章は山下優介氏(国立歴史民俗博物館 助教)に玉稿を賜った。なお、編集は石田が担当した。
- 13 第6～7章の本文および注、参考文献の表記について、著者の意向を尊重してそのままとし、あえて統一を図らなかった。
- 14 本書で報告した発掘調査で出土した遺物や図面・写真類については、米原市教育委員会で保管している。

長門寺遺跡・顔戸遺跡・高溝遺跡発掘調査報告書  
 —市道顔戸・八田羽織線道路改良工事に伴う発掘調査—

## 目次

第1章	調査の経緯	1
第2章	地理的環境・歴史的環境	1
第1節	地理的環境	1
第2節	歴史的環境	2
第3章	長門寺遺跡の調査	6
第1節	調査の経過	6
第2節	既往の調査	7
第3節	試掘調査の成果	9
第4節	発掘調査の成果	10
第4章	顔戸遺跡の調査	19
第1節	調査の経過	19
第2節	既往の調査	20
第3節	試掘調査の成果	21
第4節	発掘調査の成果	21
第5章	高溝遺跡の調査	30
第1節	調査の経過	30
第2節	既往の調査	31
第3節	試掘調査の成果	32
第4節	発掘調査の成果	36
第6章	高溝遺跡出土種実の同定および年代測定	45
第7章	古墳時代前期の顔戸遺跡群—本遺跡出土遺物の検討を中心として—	52
第8章	総括	58

## 表目次

表1 長門寺遺跡 調査履歴一覧表	7
表2 長門寺遺跡 出土遺物編年表	17
表3 長門寺遺跡 出土遺物計測表	17
表4 長門寺遺跡 調査履歴一覧表	20
表5 長門寺遺跡(Ⅰ区) 出土遺物編年表	25
表6 長門寺遺跡(Ⅰ区) 出土遺物計測表	25
表7 長門寺遺跡(Ⅱ区) 出土遺物編年表	29
表8 長門寺遺跡(Ⅱ区) 出土遺物計測表	29
表9 高峯遺跡 調査履歴一覧表	32
表10 高峯遺跡(浮城段調査) 出土遺物編年表	35
表11 高峯遺跡(浮城段調査) 出土遺物計測表	35
表12 高峯遺跡 出土遺物編年表	42～43
表13 高峯遺跡 出土遺物計測表	43
表14 種別特定・計測結果	46
表15 5期性住居層年代測定結果	49

## 挿図目次

図1 調査現場および所在地	1
図2 周辺の遺跡分布図	3
図3 長門寺遺跡の範囲と本調査位置	6
図4 長門寺遺跡 試験トレンチ配置図および月日状況	8
図5 長門寺遺跡 遺構平面図・土層断面図	11～12
図6 SD1・SD2 遺構平面図・土層断面図	14
図7 SK1 遺構平面図・土層断面図・遺物出土位置図	14
図8 長門寺遺跡 出土遺物(1)	15
図9 長門寺遺跡 出土遺物(2)	16
図10 長門寺遺跡の範囲と本調査位置	19
図11 長門寺遺跡 試験トレンチ配置図および月日状況	22
図12 長門寺遺跡(Ⅰ区) 遺構平面図・土層断面図	23
図13 S11 遺構平面図・土層断面図・遺物出土位置図	23
図14 長門寺遺跡(Ⅰ区) 出土遺物	25
図15 長門寺遺跡(Ⅱ区) 遺構平面図・土層断面図	27
図16 SD2～3・P11～H 土層断面図	27
図17 長門寺遺跡(Ⅱ区) 出土遺物	28
図18 高峯遺跡の範囲と本調査位置	30
図19 高峯遺跡 試験トレンチ配置図および月日状況	33
図20 高峯遺跡(浮城段調査) 出土遺物	35
図21 高峯遺跡 遺構平面図・土層断面図	37
図22 高峯遺跡 出土遺物(1)	39
図23 高峯遺跡 出土遺物(2)	40
図24 高峯遺跡 出土遺物(3)	41
図25 樹形年代測定結果	48
図26 モモ核	51
図27 長門寺遺跡(Ⅰ区) 出土遺物	53
図28 高峯遺跡 出土土器図	53

## 写真図版

- PL. 1 1 長門寺遺跡 調査前風景 北東から  
 2 長門寺遺跡 遺構輪郭状況 南から  
 3 長門寺遺跡 遺構輪郭状況 北から
- PL. 2 1 長門寺遺跡 SD 1 検出状況 東から  
 2 長門寺遺跡 SD 1 土層断面 西から  
 3 長門寺遺跡 SD 2 土層断面 南から
- PL. 3 1 長門寺遺跡 SD 3 土層断面 西から  
 2 長門寺遺跡 SK 1 土層断面 西から  
 3 長門寺遺跡 SK 1 遺物出土状況 北から
- PL. 4 1 長門寺遺跡 遺構完備状況 南から  
 2 長門寺遺跡 遺構完備状況 北から  
 3 長門寺遺跡 SD 1 完備状況 東から
- PL. 5 長門寺遺跡 出土遺物
- PL. 6 長門寺遺跡 出土遺物
- PL. 7 長門寺遺跡 出土遺物
- PL. 8 1 瀬戸遺跡(Ⅰ区) 調査前風景 南西から  
 2 瀬戸遺跡(Ⅰ区) 遺構輪郭状況 南から  
 3 瀬戸遺跡(Ⅰ区) 調査区南壁土層断面 北から
- PL. 9 1 瀬戸遺跡(Ⅰ区) S 1 1 検出状況 南東から  
 2 瀬戸遺跡(Ⅰ区) S 1 1 土層断面 北東から  
 3 瀬戸遺跡(Ⅰ区) S 1 1 土層断面 西から
- PL. 10 1 瀬戸遺跡(Ⅰ区) 遺構完備状況 北から  
 2 瀬戸遺跡(Ⅰ区) S 1 1 完備状況 東から  
 3 瀬戸遺跡(Ⅰ区) S 1 1 出土遺物
- PL. 11 1 瀬戸遺跡(Ⅱ区) 調査前状況 南から  
 2 瀬戸遺跡(Ⅱ区) 遺構輪郭状況 南から  
 3 瀬戸遺跡(Ⅱ区) 遺構輪郭状況 北西から
- PL. 12 1 瀬戸遺跡(Ⅱ区) SD 2～3 検出状況 南東から  
 2 瀬戸遺跡(Ⅱ区) SD 2 土層断面 南東から  
 3 瀬戸遺跡(Ⅱ区) SD 3 土層断面 西から
- PL. 13 1 瀬戸遺跡(Ⅱ区) 遺構完備状況 南から  
 2 瀬戸遺跡(Ⅱ区) 遺構完備状況 北から  
 3 瀬戸遺跡(Ⅱ区) 遺構完備状況 北西から
- PL. 14 1 瀬戸遺跡(Ⅱ区) SD 1 完備状況 南東から  
 2 瀬戸遺跡(Ⅱ区) 出土遺物  
 3 瀬戸遺跡(Ⅱ区) 出土遺物
- PL. 15 1 高浜遺跡 調査前状況 北東から  
 2 高浜遺跡 遺構輪郭状況 南から  
 3 高浜遺跡 遺構完備出土状況 東から
- PL. 16 1 高浜遺跡 遺構完備状況 南から  
 2 高浜遺跡 トレンチ東壁断面 南西から  
 3 高浜遺跡 鉢敷調査 出土遺物
- PL. 17 1 高浜遺跡 沼跡 出土遺物  
 2 高浜遺跡 沼跡 出土遺物  
 3 高浜遺跡 沼跡 出土遺物
- PL. 18 1 高浜遺跡 沼跡 出土遺物  
 2 高浜遺跡 沼跡 出土遺物  
 3 高浜遺跡 沼跡 出土遺物
- PL. 19 1 高浜遺跡 沼跡 出土遺物  
 2 高浜遺跡 沼跡 出土遺物  
 3 高浜遺跡 沼跡 出土遺物





## 本 文



## 第1章 調査の経緯

本調査地は、滋賀県の北東部に位置する米原市の顔戸・高溝地域に所在する。現在、顔戸・高溝地域には東西方向を結ぶ主要道路として、北は県道東上坂近江線が、南は県道伊部近江線が通る。県道伊部近江線は、顔戸の交差点を起点に近江口倉前交差点まで東へ延び、そこから北上し、東海道新幹線の高架を過ぎた次の交差点で県道東上坂近江線と交差する。

この県道伊部近江線の南北方向に延びる区間は、中世において米原市新庄付近から小谷城下までを結んだ、いわゆる「小谷道」と呼ばれる旧道を踏襲している。現在、この道は近隣の小中学校の通学路に指定されているものの、この周辺には上記の2つの県道を南北方向に繋ぐ道がこの旧道しか無いことから、朝夕の通勤・通学の時間帯は慢性的に交通量が多くなり、以前から危険性が指摘されてきた。

そのため、地元から旧道に代わる道路の新設要望が米原市に出され、顔戸から高溝にかけて北進する市道顔戸・八田羽織線の道路改良工事が計画された。そしてこの路線内において、埋蔵文化財包蔵地として、長門寺遺跡、正光寺遺跡、顔戸遺跡、高溝遺跡が周知されていることから、同工事に先行して事前調査の必要が生じた。試掘調査の結果、長門寺遺跡、顔戸遺跡、高溝遺跡において、遺構・遺物を確認したことから、令和元年度から令和4年度にかけてそれぞれ発掘調査を実施した。本報告では、市道顔戸・八田羽織線道路改良工事に伴う長門寺遺跡、顔戸遺跡、高溝遺跡の発掘調査の成果について報告する。



図1 滋賀県および米原市 位置図

## 第2章 地理的環境・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

顔戸遺跡群は、滋賀県米原市顔戸・高溝に位置している。米原市は滋賀県の湖北地域にあたり、総面積は250.39 km<sup>2</sup>で県土全体の6.23%を占める。米原市は北部を長浜市、南部を彦根市・多賀町、東部を岐阜県土垣市・関ヶ原町、北東部を岐阜県掛兼川町とそれぞれ接する立地であり、またJ R北陸本線・J R東海道本線・東海道新幹線・名神高速道路・北陸自動車道といった主要な幹線が交差する交通の要衝地である。

米原市は平成17年(2005年)に坂田郡山東町、坂田郡伊吹町、坂田郡米原町、坂田郡近江町の4町の合併によって誕生した市で、顔戸遺跡群が位置する米原市顔戸・高溝は旧近江町域に当たる。旧近江町は米原市の南西部に位置し、総面積18.04 km<sup>2</sup>を測る。伊吹山地南麓を源流とする赤高川から霊仙山地北麓を源流とする丹生川と梓川までの広い流域を持つ一級河川の天野川が旧近江町域を東西に横断する形で流れている。その天野川によって発達した低湿の沖積平野部と、伊吹・鈴鹿山地に続く山地帯で旧近江町域は構成されている。天野川付近は沖積作用による扇状地およびその氾濫原からなっているが、各地域で小規模な自然堤防が発達したため、古くから集落が営まれるようになった。平野部には沼沢地や小河川が存在していたとみられるが、現在は統一条例の普及による水田地帯の景観が広がっている。

植生については、日本海型、太平洋型両気候区の境界地であるため、山側に湖北植物区の最南端に、琵琶湖岸側は琵琶湖沿岸植物区になっている。湖北植物区は主に砂岩、頁岩などからなる古生層の地質であり、日本海側の要素や寒地性の植物が多く、分布の西南限となる種もある。村瀬忠義の調査(1)によると、この区にのみ自生する種としてエチゴギジムシロ、シラネウラボシ、ツルシロカネソウなどが、普通種としてムラサキヤシオツツジ、オオバコロモジ、エゾアジサイなどの植物が見られる。琵琶湖沿岸植物区は、湖水の温暖化作用が働くことで海洋性気候となっており、海岸性植物や暖地性植物が生息している。海岸性植物としてハマヒルガオ、ハマエンドウ、ハマダイコン、ハマゴウなどの草本類、暖地性植物にはタブノキ、シロバイ、リンボク、タマミズキ、モチノキ、イズセンリョウなどが見られる。

## 第2節 歴史的環境

現在、米原市では計425か所の遺跡（興加の埋蔵文化財包蔵地）が確認されており、旧近江町域では108か所確認されている。本節では瀬戸遺跡群周辺の遺跡について概観する。

### 旧石器時代・縄文時代

旧近江町域では天野川河口部に形成された沖積平野を中心に、主に弥生時代から古墳時代にかけての集落跡が多数存在する。この地域の出土遺物の中で最も古い年代のものは、狐塚遺跡（米原市高瀬）から出土した有舌尖頭器で、旧石器時代のものとされている。一方で、狐塚遺跡の東側に隣接する法勝寺遺跡（米原市高瀬）において縄文時代早期の高山寺式押型土器が広く分布していることから、この有舌尖頭器を縄文時代早期の石器とする見方もある。法勝寺遺跡の南側に隣接する高溝遺跡（米原市高瀬）では、前期の羽島下層式・北白川下層式・語織B式、中期の船元Ⅲ式・Ⅳ式、後期の中津式・福田KⅡ式・北白川上層Ⅱ式、晩期の船橋式・馬見塚式など、縄文時代前期から晩期に至るまで継続した遺物の出土が見られる。ただし、これらは古墳時代の溝から出土していることから、二次堆積と考えられる<sup>25)</sup>。このほか後期の遺構・遺物として、津蓮寺遺跡（米原市瀬戸）から称名寺式・中津式の土器や竪穴建物が発出されている<sup>26)</sup>。

### 弥生時代

弥生時代前期の遺跡として、碓遺跡（米原市宇賀野）・法勝寺遺跡・埋塚遺跡（米原市瀬戸）などがあり、埋塚遺跡では土坑から沈線文土器や貼り付け突帯文の土器が発出している<sup>27)</sup>。

中期の遺跡では、横山丘陵近辺の微高地で、宇賀野墓町遺跡（米原市宇賀野）・長沢遺跡（米原市長戸）・法勝寺遺跡・黒田遺跡（米原市瀬戸）といった遺跡が確認されている。この時期になると法勝寺遺跡で方形周溝墓群が構築され始め、当該地域の墓地区として後期に至るまで継続する<sup>28)</sup>。それに対して長沢遺跡は居住区としての性格を示しており、発掘調査においては中期の溝遺構から豊富な土器や木製品が発出している<sup>29)</sup>。同時期の遺物には、畿内の系統をひくものと近江特有のものが見られ、東海地方から東にかけての影響は薄いとみられる。

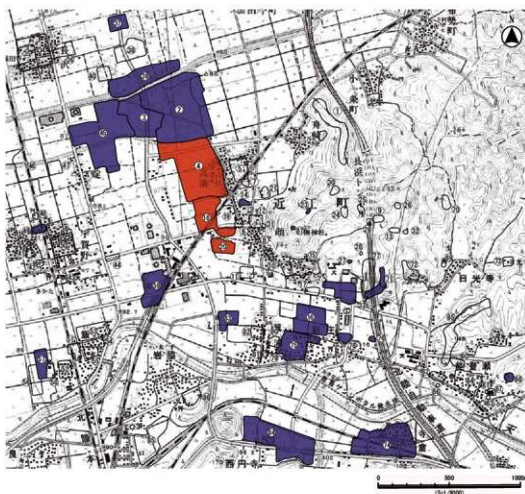
後期に入ると法勝寺遺跡を中心として奥松戸遺跡（米原市長戸）・法勝寺遺跡・長門寺遺跡（米原市瀬戸）・埋塚遺跡で方形周溝墓による一大墓域が形成される。また、西円寺遺跡（米原市西円寺）ではほぼこの墳墓群から独立した形で大型の円形低墳丘墓が出現するほか<sup>30)</sup>、法勝寺遺跡では墳墓群の核となる前方後方形周溝墓が造営される<sup>31)</sup>。法勝寺遺跡の墳墓には、①小型周溝墓が大量に作られる段階、②やや大型になり、造墓数が減少する段階、③大型の周溝墓に小型の周溝墓を伴う段階、④前方後方形周溝墓を中心に周溝墓が集まる段階の4段階が確認されている<sup>32)</sup>。

西円寺遺跡や法勝寺遺跡の事例は、均一な墳墓群が形成される弥生的な墓制から、特定の人物の墓としての性格を持つ前方後方形周溝墓が造営されるまでの変遷を迎えることができ、当地域における弥生時代後期から古墳時代にかけての墓制の移り変わりを示す貴重な事例である<sup>33)</sup>。

後期に構築された墳墓は、中期に存在した墳墓の埋没後に造られており、当地域において環境の変化による一時的な断絶期があったことが推測される<sup>34)</sup>。これらの墓制遺構はいずれも沼沢地跡や小河川跡に接した形で確認されている。

### 古墳時代

旧近江町域における古墳時代前期の墓制に関わる遺跡として日撫山古墳（米原市瀬戸）と定納古墳群（米原市日光寺）が想定されている。定納古墳群では前期後半から中期前半にかけて定納1号墳をはじめとした9基の墳墓が丘陵上に築かれており、筒型銅器や木棺を据えたとみられる痕跡が確認されている<sup>35)</sup>。この段階には集落から独立して丘陵上に墳墓が築かれるようになっており、日撫山古墳や定納古墳群は集落からの眺望が良い場所に造営されている<sup>36)</sup>。また、当該地域では古墳時代中期以降の古墳が多く確認されており、中期には帆立貝形古墳の後別当古墳（米原市瀬戸）や造り出し部を持つ円墳とみられるアマタビ遺跡（米原市瀬戸）などが、中期末には黄牛塚古墳（米原市瀬戸）、狐塚遺跡、塚の越古墳（米



- |            |            |            |                   |
|------------|------------|------------|-------------------|
| 1 舟崎山古墳群   | 23 日勝山古墳   | 45 礎遺跡     | 67 善性寺遺跡          |
| 2 法隆寺遺跡    | 24 仏光寺遺跡   | 46 五反田遺跡   | 68 山津前神社古墳        |
| 3 狐塚遺跡     | 25 円光寺遺跡   | 47 基新遺跡    | 69 日光寺古遺跡         |
| 4 高深遺跡     | 26 禰正寺遺跡   | 48 塚町古墳    | 70 日光寺山形遺跡        |
| 5 一本木遺跡    | 27 後別当古墳   | 49 平賀野墓所遺跡 | 71 常納古墳群          |
| 6 亀塚遺跡     | 28 大正寺古墳   | 50 般若光寺遺跡  | 72 大林寺遺跡          |
| 7 聖塚遺跡     | 29 美半塚古墳   | 51 北光寺遺跡   | 73 日光寺遺跡          |
| 8 山ノ前遺跡    | 30 跡戸山古墳遺跡 | 52 若宮城遺跡   | 74 寺倉遺跡           |
| 9 神郷遺跡     | 31 院内遺跡    | 53 出原遺跡    | 75 新住乳浦城遺跡        |
| 10 池野屋敷遺跡  | 32 甲塚古墳    | 54 熊村館遺跡   | 76 塚の跡古墳 (塚の越勢遺跡) |
| 11 化ノ前遺跡   | 33 神田遺跡    | 55 熊村城遺跡   | 77 大正寺遺跡          |
| 12 田中屋敷遺跡  | 34 北沢城遺跡   | 56 普明庵遺跡   | 78 新住遺跡           |
| 13 不明庵遺跡   | 35 福田寺遺跡   | 57 正原寺遺跡   | 79 井戸村館遺跡         |
| 14 鳴子塚遺跡   | 36 長沢園跡    | 58 地蔵堂遺跡   | 80 今井屋敷遺跡         |
| 15 梶ノ原屋敷遺跡 | 37 長沢遺跡    | 59 黒田遺跡    | 81 箕浦中塚遺跡         |
| 16 浄蓮寺遺跡   | 38 西火打遺跡   | 60 安松寺遺跡   | 82 笠園寺遺跡          |
| 17 安養寺遺跡   | 39 奥松戸遺跡   | 61 青木館遺跡   | 83 埋塚遺跡           |
| 18 跡戸遺跡    | 40 北松戸遺跡   | 62 中村屋敷遺跡  | 84 西内寺遺跡          |
| 19 正光寺遺跡   | 41 宇賀野寺遺跡  | 63 能登屋敷遺跡  | 85 若狭館跡           |
| 20 長門寺遺跡   | 42 遠藤屋敷遺跡  | 64 能登堀城遺跡  | 86 護摩寺遺跡          |
| 21 人塚山古墳   | 43 三田村屋敷遺跡 | 65 奥深古墳群   | 87 アミタビ遺跡         |
| 22 船崎遺跡    | 44 大王寺遺跡   | 66 百知庵遺跡   |                   |

※ 今回調査を実施した遺跡は赤文字で、本文中で言及のある遺跡は青文字でそれぞれ示した。

図2 周辺の遺跡分布図

市街の、後期には山津照神社古墳（東原市龍巻）といった古墳が築造されている。この地域で弥生時代後期から古墳時代まで連続と確認されているこれらの墳墓群によって息長古墳群が形成されている。中期末の黄牛塚古墳は横山丘陵南端の裾野に造られた横穴式石室をもつ円墳で、土師器、須恵器、勾玉などが出土した<sup>66</sup>。狐塚遺跡では弥生時代の方形周溝墓とともに古墳時代中期末から後期にかけての墳墓群が確認されており、全長30mの帆立貝形古墳である狐塚5号墳からは、多量の形象埴輪が出土している<sup>67</sup>。塚の越古墳は全長約40.4mの前方後円墳で、それ以前の古墳には見られなかった周濠・葺石を備え、畿内の技法的な特徴を持つ石見型埴輪と円筒埴輪を巡らすといった特徴を持つことから、息長古墳群における大きな画期とされている<sup>68</sup>。その後、築造されたとみられる山津照神社古墳は、息長古墳群最後の前方後円墳と考えられている<sup>69</sup>。明治15年(1882年)に山津照神社の参道工事が着工された際に埋葬施設が確認され、金銅製冠、金銅製香、鉄地金銅張馬具、刀剣、刀子、水晶製三輪玉といった副葬品が出土している。また、平成6年(1994年)に京都大学文学部考古学研究室が実施した発掘調査では、石見型埴輪と円筒埴輪が出土し、全長約46mの前方後円墳に復元された<sup>70</sup>。

一方で、居住に関わる遺構として灌漑水利用と想定される大溝遺構が出現する。この大溝遺構は、南北1.5km・東西0.8kmの規模が想定され、天野川の水を能登瀬周辺から長沢方面へと分水し、旧町域内の各遺跡を通る形で分岐を重ねているとみられる<sup>71</sup>。榑田遺跡（東原市榑田）では大溝へとつながる水路と考えられる溝状遺構が検出され、遺構内からは多量の土器が出土している<sup>72</sup>。集落域と想定されている遺跡には礎石跡や竈戸遺跡、黒田遺跡、長沢遺跡などがあり、竈戸遺跡や黒田遺跡からは掘立柱建物を検出し、長沢遺跡からは土器や木製品などが確認されている。また、黒田遺跡からは北陸・東海・近江・西国などから搬入されたとみられる土器が水辺祭祀遺構から出土するほか、大溝内より加彩土器、小型銅製鏡、ベンガラ原石、そして多量の小形土器などが確認された<sup>73</sup>。ほかにも礎石跡の大溝内からは、イヌガヤで製作された朱塗りの木製鋸歯器が見つかった<sup>74</sup>。

## 古 代

この時代については出土古瓦によって白鳳寺院の存在が知られており、旧近江町域では法勝寺遺跡・飯村庵寺（東原市飯）がある。山田寺跡（奈良県桜井市）から出土した瓦を標識とする山田寺式の軒丸瓦がそれぞれ出土しており、両寺院は造営において関連性をもつとみられる<sup>75</sup>。また水田地割に関わる遺構として、長浜平野の統一理地割、新庄集落北部の斜行地割、法勝寺遺跡を中心とした南北地割がある<sup>76</sup>。

## 中 世

当該地域においては、中世の遺跡に関する考古学的な知見は乏しい。その理由として、条理地割の整備といった要因で、居住区域が現在の住宅地と重複する位置に移ったことが考えられる。この時代の遺跡には、新庄箕浦城遺跡（東原市新庄）・浄蓮寺遺跡・寺倉遺跡（東原市寺倉）などがある。新庄箕浦城遺跡は京極氏の根本被官であった天野川流域最大の領主である今井氏の居館とされ、礎石を持つ掘立柱建物や堀、そして堀に並行する溝などが確認されている<sup>77</sup>。浄蓮寺遺跡は新庄箕浦城遺跡の北側に接する遺跡で、名称から寺を含む中世集落が想定されており、中世陶磁器や輸入磁器、瓦質土器の大型羽釜などが出土している<sup>78</sup>。寺倉遺跡ではかわらけ、輸入陶磁器、常滑産三筋壺、東播系須恵器、瓦質土釜などの遺物が出土したほか、常滑産大甕を用いた埋甕が確認されている<sup>79</sup>。

## 注

- 1) 村瀬 忠義2007『滋賀県の植物分布』『植物地理・分類研究』58(2)、植物地理・分類学会。
- 2) 宮崎 幹也1990『高溝遺跡』(近江町文化財調査報告書第4集)、近江町教育委員会。
- 3) 中村 健二ほか1991『長浜集落関係遺跡発掘調査報告書XVIII-9 箕浦城・浄蓮寺遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会。

- 4) 宮崎 幹也 1991『埋蔵遺跡2』(近江町文化財調査報告書第9集)、近江町教育委員会。
- 5) 宮崎 幹也 1990『法勝寺遺跡』(近江町文化財調査報告書第6集)、近江町教育委員会。
- 6) 中谷 雅治 1973『国道8号長浜バイパス関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ』、滋賀県教育委員会。
- 7) 宮崎 幹也 1993『西門寺遺跡』(近江町文化財調査報告書第16集)、近江町教育委員会。
- 8) 註5参照。
- 9) 註5参照。
- 10) 滋賀県立安土城考古博物館 1996『城と弥生時代』
- 11) 註5参照。
- 12) 宮崎 幹也ほか2005『定納古墳群』(近江町文化財調査報告書第28集)、近江町教育委員会。
- 13) 註12参照。
- 14) 宮崎 幹也 2000『息長古墳群1 遺跡詳細分布報告書』(近江町文化財調査報告書第20集)、近江町教育委員会。
- 15) 吉田 秀則 1988『一般国道8号(長浜バイパス)関連遺跡発掘調査報告書V 孤塚遺跡・法勝寺遺跡』、滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会。
- 16) 註12参照。
- 17) 宮崎 幹也 2003『息長古墳群3 人福山古墳発掘調査報告書』(近江町文化財調査報告書第24集)、近江町教育委員会。
- 18) 小野山 節ほか1995『琵琶湖周辺の6世紀を探る』、京都大学文学部考古学研究室。
- 19) 宮崎 幹也 1994『黒田遺跡3』(近江町文化財調査報告書第17集)、近江町教育委員会。
- 20) 宮崎 幹也 1995『近江町埋蔵文化財調査集報1』(近江町文化財調査報告書第18集)、近江町教育委員会。
- 21) 註19参照。
- 22) 中川 通士 1987『碓遺跡発掘調査報告書』(近江町文化財調査報告書第2集)、近江町教育委員会。
- 23) 滋賀県坂田郡教育会 1975『改訂近江国坂田郡志 第3巻上』、日本資料刊行会。
- 24) 近江町史編さん委員会 1989『近江町史』、近江町役場。
- 25) 註3参照。
- 26) 註25参照。
- 27) 中村 健二 1991『土場整備関係遺跡発掘調査報告書XⅡ-4 寺倉遺跡』、滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会。

#### 参考文献

- 宮崎 幹也 1991『塚の越古墳』(近江町文化財調査報告書 第10集)、近江町教育委員会。
- 宮崎 幹也 1991『碓遺跡2』(近江町文化財調査報告書 第11集)、近江町教育委員会。
- 宮崎 幹也 1991『黒田遺跡』(近江町文化財調査報告書 第12集)、近江町教育委員会。
- 宮崎 幹也 1991『黒田遺跡2』(近江町文化財調査報告書 第13集)、近江町教育委員会。
- 宮崎 幹也 1992『奥松戸遺跡』(近江町文化財調査報告書 第14集)、近江町教育委員会。
- 宮崎 幹也 1996『息長古墳群』(近江町地域文化叢書 第1集)、近江町教育委員会。
- 宮崎 幹也 2001『近江町埋蔵文化財調査集報3』(近江町文化財調査報告書 第21集)、近江町教育委員会。
- 吉田 秀則 1987『一般国道8号(長浜バイパス)関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ 西火打遺跡・孤塚遺跡』、滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会。
- 吉田 秀則 1989『一般国道8号(長浜バイパス)関連遺跡発掘調査報告書Ⅵ 奥松戸遺跡』、滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会。

## 第3章 長門寺遺跡の調査

## —第3次調査—

調査地点	滋賀県米原市願戸 2478-2、2479-2、2480-2
調査原因	市道願戸・八田羽織線道路改良工事
試掘調査期間	T 5～13；平成31年4月8日～9日 T 1～4；令和元年10月8日
発掘調査期間	令和元年7月9日～令和元年9月26日
整理作業期間	令和元年11月8日～令和2年9月30日
調査面積	280㎡
処置	調査終了後工事を許可
調査成果	遺構：溝4条、土坑1基、ピット104基、沼跡 遺物：土師器・須恵器などコンテナ3箱

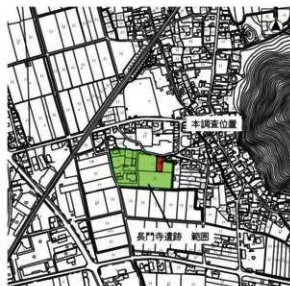


図3 長門寺遺跡の範囲と本調査位置

## 第1節 調査の経過(図3)

本調査は、市道願戸・八田羽織線の新設工事に伴い、平成31年(2019年)4月8日から9日にかけて9か所のトレンチ(T1～9)を設定し、試掘調査を実施したところ、遺構・遺物が確認されたため、発掘調査を実施する運びとなった。

発掘調査は、令和元年(2019年)7月9日から9月26日までの期間で現地調査を完了し、調査面積は280㎡で、約2か月半の調査期間を要した。その後、10月8日に本調査区の南側にて、4か所のトレンチ(T10～13)を設定して試掘調査を行ったが、遺構・遺物共に確認されなかったことから、現地での調査を終了した。同年11月8日から令和2年(2020年)9月30日にかけて整理作業を行った。

今回の調査では、弥生時代から中世に至る幅広い時期の遺構・遺物が確認されたが、その中で最も注目される遺構は、弥生時代の方形周溝状の溝である。遺物についてはSK1から古墳時代の土師器・須恵器が大量に出土した。

なお、今回の調査成果について、令和2年2月8日から3月29日にかけて、「長門寺遺跡発掘調査速報展」と題して米原市近江はにわ館にて一般公開を行った。また、『米原市文化財ニュース 佐加太 第49号』(令和2年3月27日刊行)において「長門寺遺跡発掘調査速報」と題した概要報告を掲載し、発掘調査成果の周知を図った。

以下、発掘調査の調査日誌を抄録する。

令和元年(2019年)

- 7月8日 発掘現場に器材を搬入
- 7月9日 本調査に着手。調査区を設定し、重機掘削による表土の除去
- 7月12日 調査区全体の遺構の精査開始
- 8月9日 遺構検出状況全景写真撮影
- 8月19日 遺構の掘削開始
- 8月22日 沼跡サブトレンチの写真撮影および土層断面図作成
- 9月3日 SD2のセクションベルトの写真撮影および土層断面図作成



- 9月 4日 SD3のセクションベルトの写真撮影および土層断面図作成
- 9月 9日 SK1のセクションベルトの写真撮影および土層断面図作成
- 9月10日 調査区の土層断面図作成
- 9月11日 遺構平面図の作成
- 9月17日 SD1のセクションベルトの写真撮影および土層断面図作成
- 9月20日 遺構完備状況全景写真撮影
- 9月24日 器材の撤収
- 9月26日 調査区の埋め戻し

## 第2節 既往の調査

長門寺遺跡は、滋賀県米原市顔戸に所在し、琵琶湖の東北部を南北に伸びる横山丘陵の南西裾野に位置する弥生時代の方形周溝墓、古墳時代の溝跡、中世の土坑といった幅広い年代の遺構で構成される複合遺跡である。長門寺遺跡は周辺に所在している、高溝遺跡・顔戸遺跡・正光寺遺跡と共に「顔戸遺跡群」を形成しており、長門寺遺跡はこの遺跡群の南端に位置している。

この長門寺遺跡の範囲は南北95m×東西250mを測り、遺跡の中央部には古くから小字に「長門寺」という地名が存在しており、寺院に関連した遺跡であると周知されてきた。

平成2年(1990年)7月25日から9月10日にかけて第1次調査が実施され、調査面積は約400㎡で、上下二層の重層する遺構面が確認された<sup>(1)</sup>。上層の遺構面は、現地表面下約40cmで検出され、井戸跡と推測される土坑1基が確認された。また下層の遺構面は、現地表面下約80cmで検出され、弥生時代の方形周溝墓が3基確認されている。この3基の方形周溝墓のうち、SX9001の周溝部分から、近江地域の特徴である受口状縁を持つ手あぶり型土器や甕、また胴部の張り出した壺などが出土している。

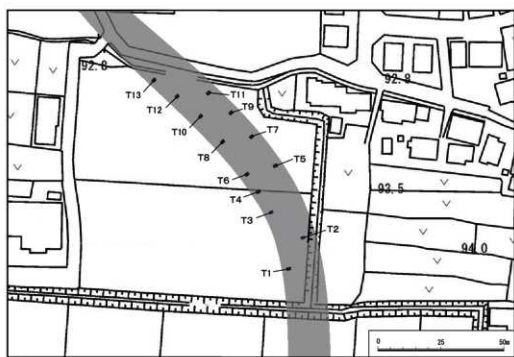
また、平成7年(1995年)7月1日から平成8年(1996年)3月29日にかけて第2次調査が実施され、方形周溝墓は検出されなかったものの、古墳時代の溝が検出されている<sup>(2)</sup>。この溝は、出土遺物により6世紀後半のものとして推測されている。また、長門寺遺跡の北東約100mの場所に位置する亀塚遺跡から、同じ時期の遺物が出土している。

表1 長門寺遺跡 調査履歴一覧表

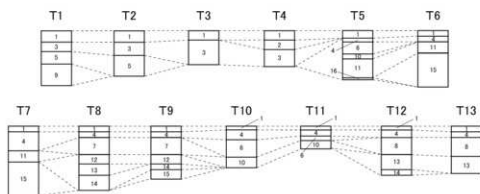
調査回数	調査年度	調査主体	担当者	調査原因	調査面積	所在地	文献
第1次	平成2年度	近江町教育委員会	宮崎幹也	個人住宅建設等	約400㎡	滋賀県米原市顔戸 地先	近江町埋蔵文化財調査集報1
第2次	平成7年度	近江町教育委員会	宮崎幹也	個人住宅建設等	約30㎡	滋賀県米原市顔戸 地先	近江町埋蔵文化財調査集報3

### 注

- 1) 宮崎 幹也1995『近江町埋蔵文化財調査集報1 国庫補助事業「町内遺跡発掘調査」報告書』(近江町文化財調査報告書第18集)、近江町教育委員会。
- 2) 宮崎 幹也2001『近江町埋蔵文化財調査集報3 町内遺跡発掘調査報告書』(近江町文化財調査報告書第21集)、近江町教育委員会。



---市道跡門・八田羽織線新設予定地



層名	備考	層名	備考
1	Has 2.513/2 黒褐色粘質土	9	Has 2.5014/1 橙オリーブ色砂礫層
2	Has 2.514/1 黄灰色粘質土	10	Has 2.5193/1 黒粘土 (1094/2 深層部より土質変化)
3	Has 2.5193/1 黒褐色砂礫層	11	Has 10194/2 灰黄粘土
4	Has 2.514/1 黄灰粘土	12	Has 7.5012/1 砂質粘土
5	Has 10194/1 褐灰色砂礫層	13	Has 10016/1 緑灰粘土
6	Has 10194/1 褐灰粘質土 (1-3mの中層部より)	14	Has 2.5014/1 橙オリーブ灰シルト
7	Has 2.5193/1 黒粘質土 (1-5mの中層部より)	15	Has 10193/1 黒粘土
8	Has 514/1 灰粘質土 (1-5mの中層部より)	16	Has 515/2 灰オリーブ粘質土

図4 長門寺遺跡 試掘トレンチ配置図および柱状図

## 第3節 試掘調査の成果(図4)

道路改良工事予定地内において、平成31年(2019年)4月8～9日に2m×3mの試掘トレンチを9か所(T5～T13)、令和元年(2019年)10月8日に2m×3mの試掘トレンチを4か所(T1～4)設定して、土層の堆積状況の確認および遺構・遺物の検出に努めた。なお、掘削作業には重機を用いた。各試掘トレンチの基本層序について以下のとおりである。

- T 1 掘削深度はGL=-1.45mで、現地表面よりI層：耕土(30cm)、II層：黒褐色砂礫層(25cm)、III層：褐灰色砂礫層(33cm)、IV層：暗オリーブ色砂礫層(57cm)であった。
- T 2 掘削深度はGL=-1.2mで、現地表面よりI層：耕土(30cm)、II層：黒褐色砂礫層(35cm)、III層：褐灰色砂礫層(55cm)であった。
- T 3 掘削深度はGL=-0.9mで、現地表面よりI層：耕土(25cm)、II層：黒褐色砂礫層(65cm)であった。
- T 4 掘削深度はGL=-0.95mで、現地表面よりI層：耕土(25cm)、II層：黄灰色粘質土(25cm)、III層：黒褐色砂礫層(45cm)であった。
- T 5 掘削深度はGL=-1.5mで、層序は現地表面よりI層：耕土(15cm)、II層：黄灰色粘土(15cm)、III層：灰黄褐色粘土(30cm)、IV層：黒褐色砂礫層(90cm)であった。
- T 6 掘削深度はGL=-1.3mで、層序はI層：耕土(20cm)、II層：黄灰色粘土(10cm)、III層：褐灰色粘質土(32cm)、IV層：黒褐色粘土(13cm)、V層：灰黄褐色粘土(50cm)、VI層：灰オリーブ色粘質土(5cm)であった。
- T 7 掘削深度はGL=-1.4mで、層序は現地表面よりI層：耕土(15cm)、II層：黄灰色粘土(50cm)、III層：灰黄褐色粘土(35cm)、IV層：黒褐色砂礫層(80cm)であった。
- T 8 掘削深度はGL=-1.1mで、層序は現地表面よりI層：耕土(10cm)、II層：黄灰色粘土(26cm)、III層：褐灰色粘質土(66cm)、IV層：黒褐色粘土(26cm)であった。T10において遺構・遺物が確認された。
- T 9 掘削深度はGL=-1.7mで、層序は現地表面よりI層：耕土(15cm)、II層：黄灰色粘土(15cm)、III層：黒褐色粘質土(45cm)、IV層：緑黒色粘土(25cm)、V層：緑灰色粘土(30cm)、VI層：暗オリーブ灰色シルト(40cm)であった。なお、掘削中に激しい湧水が見られた。
- T 10 掘削深度はGL=-1.1mで、層序は現地表面よりI層：耕土(10cm)、II層：黄灰色粘土(16cm)、III層：褐灰色粘質土(12cm)、IV層：黒褐色粘土(22cm)であった。T10において遺構・遺物が確認された。
- T 11 掘削深度はGL=-1.4mで、層序は現地表面よりI層：耕土(15cm)、II層：黄灰色粘土(15cm)、III層：黒褐色粘質土(45cm)、IV層：緑黒色粘土(25cm)、V層：暗オリーブ灰色シルト(15cm)、VI層：黒褐色砂礫層(25cm)であった。T9と同様で、掘削中に激しい湧水が見られた。
- T 12 掘削深度はGL=-1.3mで、層序は現地表面よりI層：耕土(10cm)、II層：黄灰色粘土(20cm)、III層：灰色粘質土(45cm)、IV層：緑灰色粘土(40cm)、V層：暗オリーブ灰色シルト(15cm)であった。
- T 13 掘削深度はGL=-1.25mで、層序は現地表面よりI層：耕土(15cm)、II層：黄灰色粘土(15cm)、III層：灰色粘質土(50cm)、IV層：緑灰色粘土(45cm)であった。

遺構・遺物について、T8で南北方向に主軸を持つ幅40cmの溝1条とビット2基を検出した。検出した2基のビットのうち、1つのビットから柱根が確認された。このビットの直径は30cm、柱根の直径は6cmで、このビットから土師器片が出土している。T10においても遺構が検出され、東西方向に主軸を持つ幅40cmの溝1条が検出された。この溝からは土師器片が出土している。なお、出土した遺物は小片のため、年代は不明である。

試掘調査の結果、T8、10において遺構・遺物が確認されたことから、本調査の必要ありと判断した。なお、

そのほかのトレンチにおいては遺構、遺物の確認には至らなかったため、写真撮影および柱状図作成などの記録作業を実施し、記録作業後は調査地を現状に復して調査を終了した。

#### 第4節 発掘調査の成果

##### (1) 層序

現地表面からⅠ層：耕土、Ⅱ層：褐灰色粘質土、Ⅲ層：黒褐色粘質土、Ⅳ層：にぶい黄褐色粘質土と続く。試掘調査において、Ⅳ層の上面（検出面標高：L=90.5m）で遺構を検出したことから遺構面と判断し、この面で遺構の検出に努めた。調査範囲について、T8、T10で遺構が検出されたことから、この地点を中心に280mの範囲で調査区を設定した。

##### (2) 検出した遺構(図5～7)

###### SD1

調査区の中央西壁付近でSD1を検出した。試掘調査のT8で検出した溝と同じ溝である。SD1は、全長約12.5m、幅0.7m、深さ0.15mを測り、コの字状を呈する。SD1は調査区西側の水田の下に続いているとみられる。第1次調査において、方形周溝墓が検出されていることから、この溝も方形周溝墓の周溝とみられるが、今回の調査では供献土器が伴わなかった。

###### SD2

SD2は調査区の西壁付近でSD1の傍で検出された。試掘調査のT10で検出した溝と同じ溝である。SD2は、全長約5.5m、幅0.5m、深さ0.5mを測り、半円形を呈する。SD2は調査地西側の水田の下に続いているとみられる。既往の調査結果から、この溝も方形周溝墓の周溝部分に該当するとみられるが、今回の調査では供献土器が伴わなかったため、こちらも方形周溝墓である可能性の提示にとどめた。

###### SD3

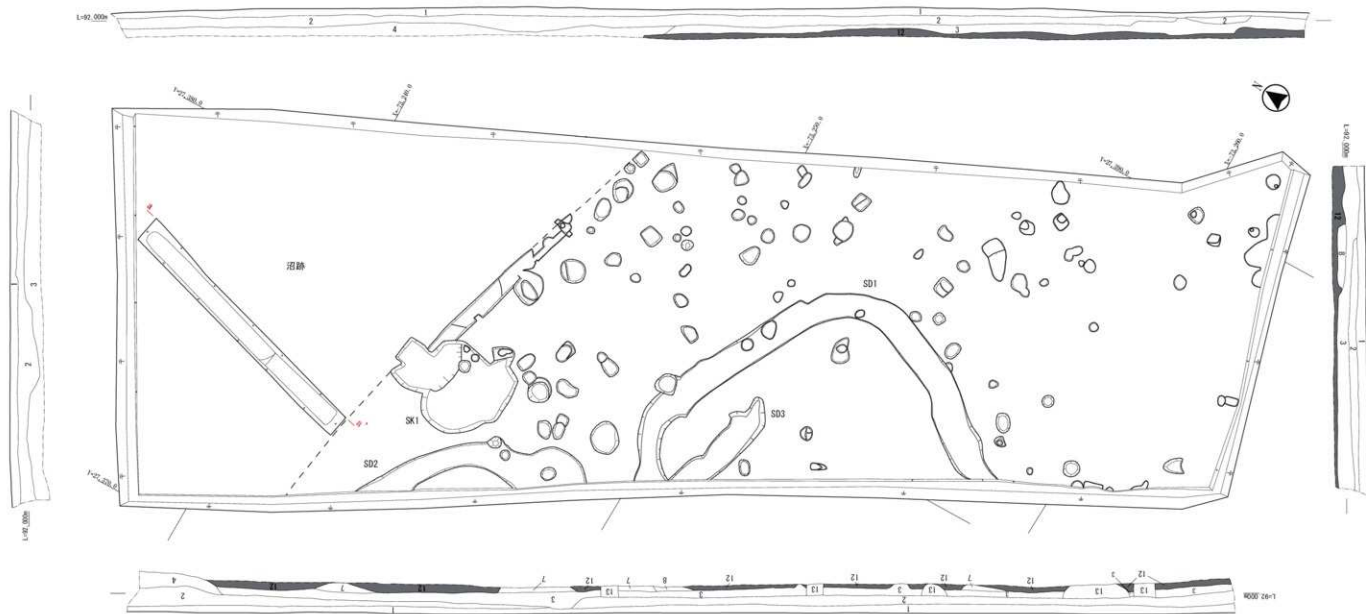
調査区の中央西壁付近でSD3を検出した。SD3は、長さ約3m、幅0.8m、深さ0.1mを測り、西から東にかけて緩やかに傾斜している。この溝も調査区西側の水田の下に延びているとみられるが、全長は不明である。この溝からは遺物は出土しなかった。

###### SK1

調査区の中央よりやや北側、沼跡の側で土坑を検出した。この土坑は南北2.8m、東西2.1m、深さ0.34mを測る。この土坑から土師器や須恵器などが大量に出土している。今回の調査で出土した遺物のほとんどがこの土坑から出土した。

##### 沼跡

調査区の北側で、沼跡を検出した。沼跡にサブトレンチを入れて堆積状況を確認したところ、汀線から5mほど緩やかに下がり、その先は急激に落ち込む地形であることが分かった。本調査では沼跡から遺物は出土しなかったが、試掘調査では、ビニール袋など現代の遺物が出土している。この沼がいつから存在していたのかは不明であるが、堆積層よりビニール袋が出土していることから、少なくとも近現代まで存在していたとみられる。なお、沼の汀線には近現代に打たれたとみられる杭列が残存していた。



層名	土質・土色	備考
1層	Hue2-S14/1黄灰色粘土	耕土
2層	Hue1-1019R4/1緑灰色粘質土(3~5cmの硬を含む)	遺成土
3層	Hue1-1019R2/1黒褐色粘質土	
4層	Hue5-S14/1灰色粘土	沼跡
5層	Hue1-10016/1緑灰色粘土	沼跡
6層	Hue2-S074/1緑オリーブ灰色シルト	沼跡
7層	Hue1-1019R2/1黒褐色粘質土(Hue1-1019R4/3に含み黄褐色粘質土混じる)	SD 1~2

層名	土質・土色	備考
8層	Hue1-1019R2/1黒褐色粘質土(Hue1-1019R4/3に含み黄褐色粘質土ブロック混じる)	SD 3
9層	Hue1-1019R2/1黒色粘質土(Hue5-S14/3緑オリーブ粘質土ブロック含む)	
10層	Hue5-S14/3緑オリーブ粘質土	
11層	Hue1-1019R4/1緑灰色粘質土	
12層	Hue1-1019R4/3に含み黄褐色粘質土	
13層	Hue1-1019R2/1黒色粘質土	

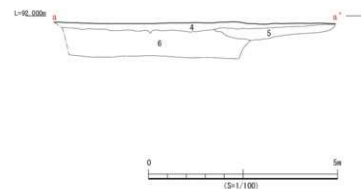


図5 長門寺遺跡 遺構平面図・土層断面図

## (3) 出土遺物(図8～9、表2～3)

SK1からは須恵器や土師器が出土しており、これらの中から、残存状況の良い32点を選び図化した。

## 須恵器

須恵器は蓋・坏身・高坏・壺・器台・甕・甕などの器種が出土している。それぞれ、5世紀前半から後半頃のものとみられる。

1～3は須恵器の蓋である。1は天井部に回転ヘラケズリが見られる。2は口縁が半分ほど残存し、外面内面ともにナデ調整が見られる。3は口縁の残りが良くないため、復元には至らなかった。外面内面ともにナデ調整が施されている。

4～8は須恵器の坏身である。4は口縁部がやや内傾しながら立ち上がり、端部には段を持つ。底部に回転ヘラケズリが見られる。5は口縁が四分の一ほど残存している。外面内面ともにナデ調整が見られる。6は口縁の残存率が低い底部の残りが良く、全体として丸みを帯びている。口縁部は内反しながら立ち上がる。受部には沈線が見られる。7は色調が灰白色でやや軟質であるため、焼成が甘く生焼けの可能性が指摘できる。8は7と同様にやや軟質で焼成が甘い。底部には回転ヘラケズリが施されている。

9～16は須恵器の高坏である。9は坏部が半分ほど残存しており、脚部は完存している。坏部はやや傾いた状態で脚部に付けられており、坏部の中心と脚部の中心は一致しない。脚部はハの字形に外反し、三角形の透かし孔が三方に見られる。端部には段を持ち、段の上部には沈線が、中程には不明瞭な凸線が見られる。また、段の上端は透かし孔の下端に一致する。10・11は坏部のみ残存しているが、脚部の痕跡のみみられたため高坏と判断した。また、どちらも外面に回転ヘラケズリが見られる。11は焼成が甘く、やや軟質である。12・13は脚部のみ残存している。12は下部にかけて外反しており、端部には段を持つ。段は上部に沈線が見られる。透かし孔の痕跡のみみられ、少なくとも二方向にはあったとみられる。13は下部にかけて外反しており、端部には段を持つ。段は上部に沈線が見られる。透かし孔の痕跡のみみられ、少なくとも二方向にはあったとみられる。14・15は坏の底部と脚部の一部が残存している。14の脚部はハの字形に外反し、端部には段を持つ。脚部の欠けた部分の様子から、透かし孔が少なくとも二つ存在したとみられる。15の脚部はハの字形に外反し、端部には丸みを帯びた段を持つ。透かし孔は残存していないが、脚部の残存部分の痕跡から判断すると、三角形の透かし孔が三方向に存在したとみられる。16は坏部の底部と脚部のほとんどが残存している。脚部には台形に近い三角形の透かし孔が二方向確認できるが、残存部分の痕跡から、三方向の透かし孔があったとみられる。脚部はハの字形に外反し、端部にやや内傾する段を持つ。

17は須恵器の壺である。口縁が一部残存しており、頸部から口縁部にかけて外反しながら立ち上がる。

18は須恵器の器台である。口縁部の下に2本の凸線が形成されており、その下に三条の波状文が施されている。

19は須恵器の甕である。頸部から口縁部にかけて外反している。頸部にはナデ調整が見られる。

20は須恵器の甕である。底部に近い部分の破片とみられる。穿孔の存在は不明である。

## 土師器

21は土師器の壺である。頸部より上は失われているが、体部はやや扁平な形状をしている。外面内面ともにナデ調整が主であるが、内面の底部ではハケメ調整も確認できる。1～5mm程度の小石を含む。

22～24は土師器の甕である。22は口縁部内面には凹凸はなく、緩やかに立ち上がり、口縁端部には平垣面を持つ。肩部にはハケメ調整が見られる。1～2mm程度の小石を含む。23・24は「く」字状口縁を持つ甕である。23は肩部にハケメが施されている。胎土はやや粗く、1～3mm程度の小石を含む。24は外面内面ともに劣化が激し

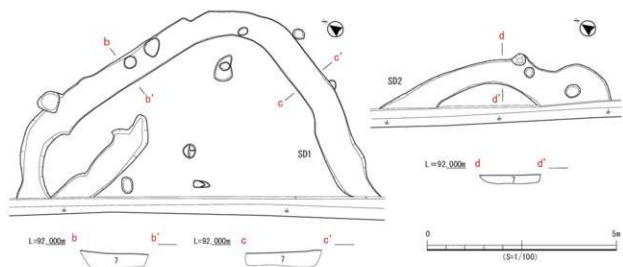


圖6 SD1・SD2 遺構平面圖・土層断面圖 (S=1/40)

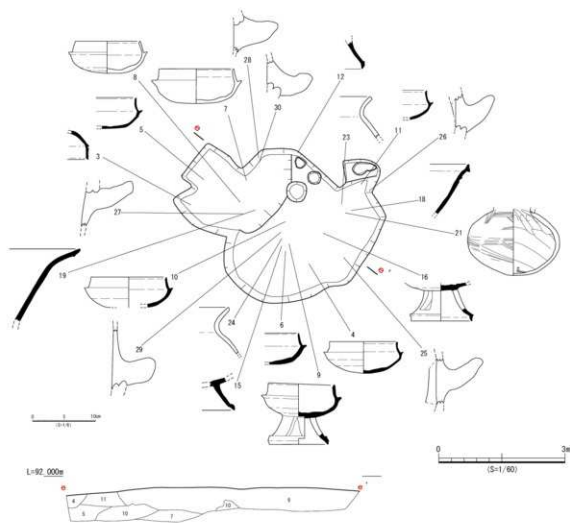


圖7 SK1 遺構平面圖・土層断面圖 (S=1/40)・遺物出土位置圖

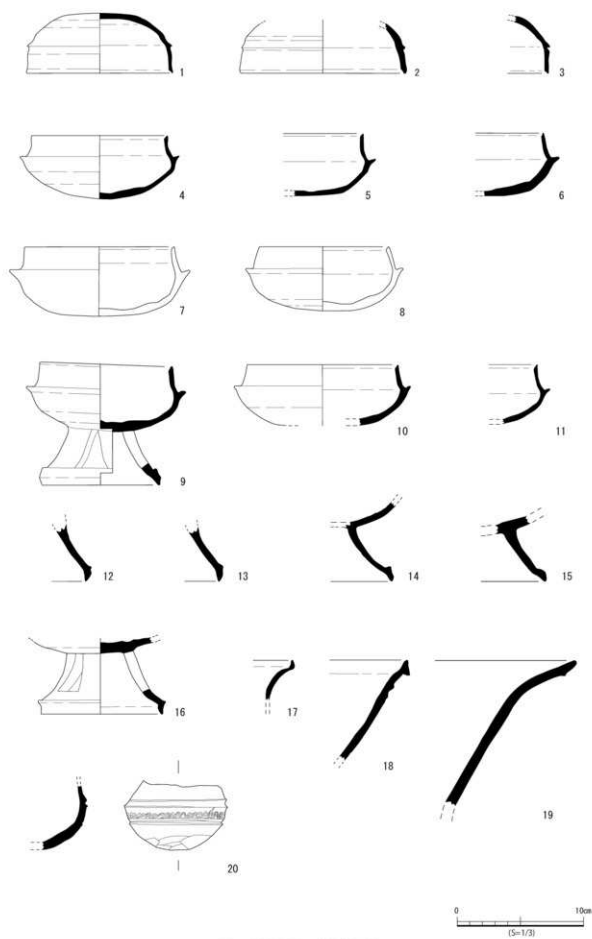


圖8 長門寺遺跡 出土遺物(1)



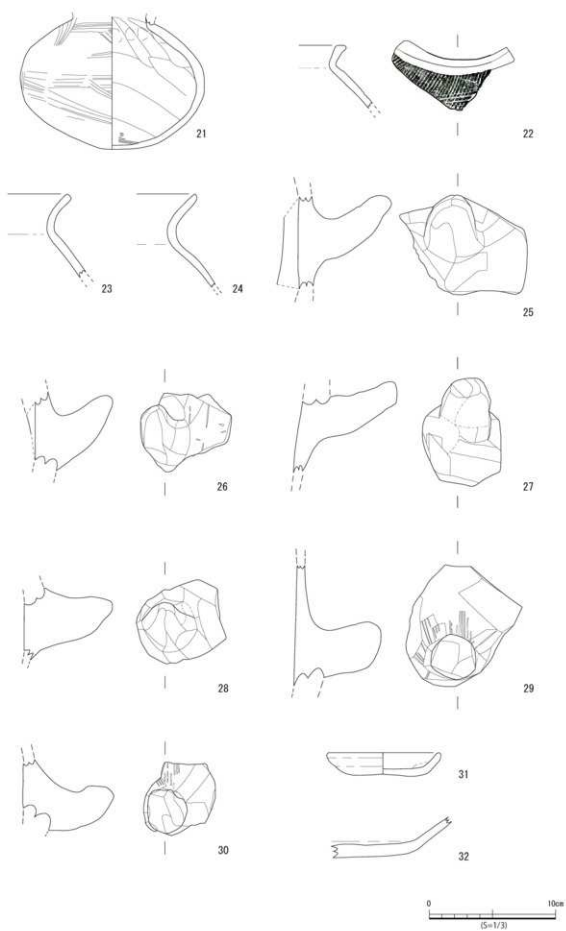


图9 長門寺遺跡 出土遺物(2)

表2 長門寺遺跡 出土遺物観察表

報告書番号	種別	器種	破片数	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)	構成	胎土	色調
1	須恵器	蓋	2	[11.6]	—	4.8	102	堅焼	密	外: 灰白色 内: 灰色
2	須恵器	蓋	5	[13.0]	—	(3.9)	53	堅焼	密	灰色
3	須恵器	蓋	1	—	—	(4.3)	24	堅焼	密	灰色
4	須恵器	坏身	1	10.8	—	5.1	192	堅焼	密	灰色
5	須恵器	坏身	1	—	—	(4.9)	62	堅焼	密	灰色
6	須恵器	坏身	2	—	—	(3.0)	102	堅焼	密	外: 灰白色 内: 灰色
7	須恵器	坏身	4	11.9	—	5.5	203	中々紋	中々粗	灰白色
8	須恵器	坏身	2	[10.5]	—	(5.1)	111	中々紋	中々粗	外: 灰色 内: 灰白色
9	須恵器	高坏	1	[10.0]	9.3	(9.8)	242	堅焼	中々密	灰色
10	須恵器	高坏	1	[12.0]	—	(4.8)	91	堅焼	密	灰色
11	須恵器	高坏	1	—	—	(4.7)	29	中々紋	中々密	灰色
12	須恵器	高坏	1	—	—	(4.6)	31	堅焼	密	灰白色
13	須恵器	高坏	1	—	—	(4.4)	21	堅焼	密	灰色
14	須恵器	高坏	2	—	—	(5.4)	26	堅焼	密	灰色
15	須恵器	高坏	1	—	—	(5.2)	98	堅焼	中々密	外: 灰色 内: 灰白色
16	須恵器	高坏	1	—	9.5	(4.7)	29	堅焼	密	灰色
17	須恵器	蓋	1	—	—	(3.2)	16	中々紋	密	外: 青灰色 内: 灰白色
18	須恵器	钵台	1	—	—	(8.0)	97	堅焼	密	灰色
19	須恵器	甕	1	—	—	(14.5)	226	堅焼	密	灰色
20	須恵器	鉢	1	—	—	(5.1)	62	堅焼	中々密	灰色
21	土師器	蓋	45	—	—	(10.4)	426	中々紋	中々粗	浅黄褐色
22	土師器	甕	1	—	—	(5.0)	47	中々紋	粗	灰黄褐色
23	土師器	甕	4	—	—	(6.7)	76	中々紋	中々粗	灰色
24	土師器	甕	6	—	—	(7.4)	119	紋	中々粗	浅黄褐色
25	土師器	甕	1	—	—	(7.5)	201	中々紋	中々粗	浅黄褐色
26	土師器	甕	1	—	—	(7.2)	121	中々紋	中々粗	褐色
27	土師器	甕	1	—	—	(8.5)	153	中々紋	中々密	褐色
28	土師器	甕	1	—	—	(5.8)	165	中々紋	中々粗	灰白色
29	土師器	甕	1	—	—	(9.5)	228	中々紋	密	浅黄褐色
30	土師器	甕	1	—	—	(5.5)	130	中々紋	中々粗	浅黄褐色
31	土師器	皿	1	8.3	—	1.9	66	紋	—	灰白色
32	土師器	甕	5	—	—	(3.1)	102	紋	—	外: 浅黄褐色 内: 灰白色

※( ): 残存値 [ ]: 復元値

表3 長門寺遺跡 出土遺物計測表

出土位置	種別	破片数	重量 (g)
S1	須恵器	608	4274
S1	土師器	81	2889
S1	陶器	2	4

総量 691 7167

(美濃遺物倉7)

い、胎土は粗く、1～4mm程度の小石を多く含む。

25～30は土師器の把手部分である。25・26はナデ調整が主であり、体部から把手端部までナデを施す箇所も確認できる。把手の付け根部分では、ハケメの痕跡が見られるが不明瞭である。25・26ともに1～3mm程度の小石を含む。27・28は体部から付け根にかけてナデ調整が見られる。把手部は下方から上方へ撮るように形成したと想定され、調整痕は顕著ではない。1～2mm程度の小石を含む。27の色調は橙色であるのに対し、28は灰白色である。29・30は体部から把手の付け根にかけてハケメ調整が見られる。把手部分は体部から先端へかけてナデ調整が見られる。1～2mm程度の小石を含む。29・30ともに浅黄褐色である。

31は土師器の皿で、ビットから出土した。器高が低く、やや厚い器壁を持つ。

32は土師器の甕とみられる。底部が残存しており、外面にはハケメ調整が施されている。

出土遺物の多くが、5世紀代のものであることから、SK1はこの時期の遺構と考えられる。21の壺については、SK1よりも遡る遺物と想定され、混入したものとみられる。また31の土師器皿は、長門寺遺跡の第1次調査で検出された室町期の遺構に併行する時期の遺物であると考えられる。

#### 参考文献

- 赤塚次郎・早坂浩二 2001 「松河戸・宇田様式の再編」『研究紀要 第2号』愛知県埋蔵文化財センター。
- 植田文雄 2007 『前方後方墳』出現社会の研究。学生社。
- 木戸雅寿 1989 「近江における15～16世紀の土器について」『中近世土器の基礎研究V』。日本中世土器研究会。
- 中村 浩 1981 『和泉陶色窯の研究—須恵器生産の基礎的考察—』。柏書房。
- 1993 『古墳時代須恵器の編年的研究』。柏書房。

## 第4章 顔戸遺跡の調査

## — 第3次調査 —

調査地点	滋賀県米原市顔戸 2219、2220
調査原因	市道顔戸・八田羽織線道路改良工事
試掘調査期間	T 1～3：令和2年10月14日 T 4～5：令和2年11月18日
発掘調査期間	I 区：令和2年11月9日～11月18日 II 区：令和3年10月21日～11月5日
整理作業期間	I 区：令和2年11月21日～令和3年1月29日 II 区：令和3年11月6日～12月18日
調査面積	I 区：53.35㎡ II 区：39.06㎡
処 置	調査終了後工事を許可
調査成果	堅穴建物1基、溝3条、ピット14基 土師器、須恵器などコンテナ1箱分出土



図10 顔戸遺跡の範囲と本調査位置

## 第1節 調査の経過(図10)

市道顔戸・八田羽織線道路改良工事に伴い、顔戸遺跡の範囲内において、令和2年(2020年)10月14日に計3か所のトレンチ(T1～3)を設定し、試掘調査を実施したところ、遺構・遺物が確認されたため、発掘調査を実施する運びとなった。工事の進捗状況の関係で、工事予定地をI区とII区に分けて発掘調査を実施した。

I区は、令和2年11月9日から11月18日までの期間で調査を完了した。調査面積は53.35㎡で、実働8日の調査期間を要した。その後、11月18日に本調査区の南側にて、2か所のトレンチ(T4～5)を設定して試掘調査を行ったが、遺構・遺物共に確認されなかった。

II区は、令和3年(2021年)10月21日から11月5日までの期間で調査を完了した。調査面積は39.06㎡で、実働10日の調査期間を要した。現地での調査終了後、I区の整理作業を令和2年11月21日から令和3年1月29日にかけて、II区の整理作業を令和3年11月6日から12月18日にかけて実施した。

今回の調査では、古墳時代の堅穴建物1基とその建物に伴う溝1条、東西方向に伸びる溝2条を検出した。今回出土した遺物のほとんどが堅穴建物および溝から出土したもので、主に古墳時代の土師器が出土している。

以下、発掘調査の調査日誌を抄録する。

令和2年(2020年)

- 11月9日 I区の本調査に着手。発掘現場に器材を搬入。調査区を設定し、重機掘削により表土を除去
- 11月10日 調査区全体の遺構精査
- 11月11日 調査区全体の遺構精査
- 11月12日 遺構検出状況全景写真撮影。遺構の掘削開始。遺構の土層断面図作成
- 11月13日 遺構の掘削。調査区の土層断面図作成
- 11月16日 遺構の掘削
- 11月17日 S I 1のセクションベルトの写真撮影および除去。遺構の平面図・土層断面図作成
- 11月18日 遺構完掘検出状況全景写真撮影。調査区の埋め戻し。器材の撤収

令和3年(2021年)

- 10月21日 II区の本調査に着手。器材の搬入。調査区を設定し、重機掘削により表土を除去
- 10月22日 調査区の遺構精査
- 10月26日 調査区の遺構精査。サブトレンチの設定および掘削
- 10月27日 遺構検出状況全景写真撮影。遺構の掘削開始
- 10月28日 遺構の掘削
- 10月29日 遺構の掘削
- 11月1日 遺構の土層堆積状況写真撮影。調査区の土層断面図および遺構の土層断面図作成
- 11月2日 S D 1のセクションベルト除去。調査区全体の清掃
- 11月4日 遺構完掘状況全景写真撮影。遺構平面図の作成
- 11月5日 調査区の埋め戻し。器材の撤収

## 第2節 既往の調査

顔戸遺跡は、古墳時代前期を中心とした集落遺跡で、これまで第1～2次の計2回にわたって発掘調査が実施されている。県営ほ場整備に伴って実施された第1次調査(昭和61～63年度)では、「三反田地区」・「大井A地区」・「大井B地区」・「茶屋町地区」の4区に分け、第1トレンチ～第8トレンチを設定して調査が行われた<sup>(i)</sup>。西方の三反田地区を中心に古墳時代の建物遺構と大溝遺構が確認され、ここで検出された大溝遺構については、環濠の西端と判断され、その環濠の内側に当たる部分で古墳時代の掘立柱建物も確認されていることから、環濠集落として理解されている。また、「大井A地区」・「大井B地区」・「茶屋町地区」と標高の高い東へ移行するにつれ、新しい時代の遺構が存在し、「茶屋町地区」に至っては、全体が平安時代後期の遺構で構成されている。

第2次調査(平成元年度)は、パイプライン埋設と灌漑排水管理設工事に伴って実施された<sup>(ii)</sup>。調査は、調査区を12分割して行われ、第7トレンチで、竪穴建物および建物に平行する溝が確認されている。検出された竪穴建物は、一辺7m前後の方形プランを呈しており、主柱穴が2か所検出されている。壁高約18cmを測り、上方の削平行為が想定されている。また、第10トレンチでは、幅6m、深さ1.4mを測る大溝遺構が検出されている。これについて、①調査の規模が小さいこと、②大溝遺構を検出した「三反田地区」と距離が離れていることなどから、直接的に結び付けられるは難しいものの、第1次調査の「三反田地区」で検出された環濠に類似した遺構と推測されている。

## 注

- 1) 宮崎 幹也1990『顔戸遺跡』(近江町文化財調査報告書 第5集)、近江町教育委員会。
- 2) 宮崎 幹也1990『埋塚遺跡』(近江町文化財調査報告書 第8集)、近江町教育委員会。

表4 顔戸遺跡 調査履歴一覧表

調査次数	調査年度	調査主体	担当者	調査目的	調査面積	所在地	文献
第1次	昭和61～63年度	近江町教育委員会	中川通士	県営ほ場整備事業	約3,800㎡	滋賀県米原市顔戸 地先	近江町文化財調査報告書 第5集、第7集
第2次	平成元年度	近江町教育委員会	宮崎幹也	県営灌漑排水事業	約365㎡	滋賀県米原市顔戸 地先	近江町文化財調査報告書 第8集、埋塚遺跡

### 第3節 試掘調査の成果(図11)

道路改良工事予定地内において、令和2年10月14日に2m×3mの試掘トレンチを3か所(T1~3)、令和2年11月18日に2m×3mの試掘トレンチを2か所(T4~5)設定して、土層の堆積状況の確認および遺構・遺物の検出に努めた。なお、試掘調査は重機を用いて掘削作業を行った。各試掘トレンチの基本層序について以下の通りである。

- T 1 掘削深度はGL=-1.1mで、層序は現地表面よりI層：耕土(40cm)、II層：黒褐色砂質土(70cm)であった。II層目の黒褐色砂質土は現代の造成土で、北側の悪用水路の設置工事の際に造成されたとみられる。
- T 2 掘削深度はGL=-0.45mで、層序は現地表面よりI層：耕土(25cm)、II層：にぶい赤褐色砂質土(20cm)であった。
- T 3 掘削深度はGL=-0.55mで、層序は現地表面よりI層：耕土(40cm)、II層：黒褐色粘質土(15cm)であった。T3において遺構・遺物が確認された。
- T 4 掘削深度はGL=-0.7mで、層序は現地表面よりI層：耕土(45cm)、II層：褐色砂質土(10cm)、III層：暗赤褐色砂質土(15cm)であった。
- T 5 掘削深度はGL=-0.8mで、層序は現地表面よりI層：耕土(30cm)、II層：暗赤褐色砂質土(50cm)であった。

遺構・遺物について、T3で竪穴建物跡(以下、S11)を1基検出した。このS11より土師器の小片が出土している。S11の検出面の高さは、GL=-0.4mである。

試掘調査の結果、T3で遺構および遺物が確認されたことから、本調査の必要ありと判断した。なお、T2、T4~5においては遺構、遺物の確認には至らなかったため、写真撮影および柱状図作成などの記録作業を実施し、記録作業後は調査地を現状に復して調査を終了した。

### 第4節 発掘調査の成果

#### 1 I区

##### (1) 層序

現地表面からI層：耕土、II層：黒褐色粘質土の順に堆積している。試掘調査において、II層の上面(検出面標高：L=91.20)でS11を検出したことから遺構面と判断し、この面において遺構の検出に努めた。

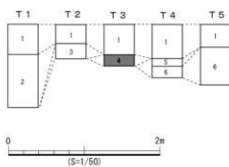
##### (2) 検出した遺構(図12~13)

#### S11

南北に方位軸持つ、南北3.7m×東西2.9mの方形プランを呈する竪穴建物跡(S11)である。床面の高さは、標高約91.1mである。壁高は約11cmで、上方の削平行が予想される。また、壁溝は検出されなかったが、建物の南東部と南西部の2か所に支柱跡(P9~10)を検出した。今回、出土した遺物のほとんどがS11から出土しているが、いづれも小片のみで、図化できたのは3点のみである。出土遺物として、受口状口縁を持つ土師器の甕が出土している。出土遺物により、竪穴建物の年代は古墳時代前期が想定される。



---市道顔戸・八田羽織線新設予定地



層名	土質・土色	備考
1層	Hus2.5Y3/2 黒褐色粘質土	耕土
2層	Hus10R3/2 黒褐色砂質土	
3層	Hus5Y4.4 にぶい赤褐色砂質土	
4層	Hus10R2/3 黒褐色粘質土	遺構検出面
5層	Hus10R4.4 褐色砂質土	
6層	Hus5R2/3 暗赤褐色砂質土	2~5mの層を多く含む

図 11 顔戸遺跡 試掘トレンチ配置図および柱状図

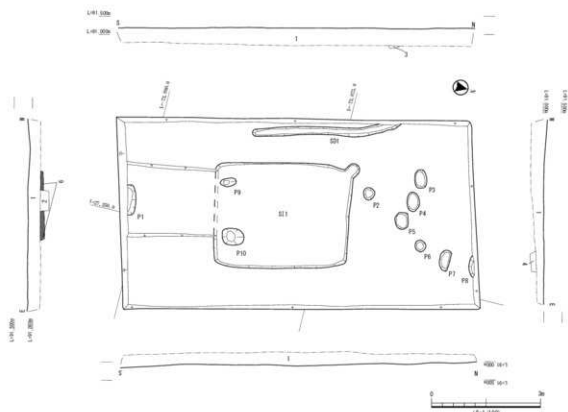


図12 藤戸遺跡(1区) 遺構平面図・土層断面図

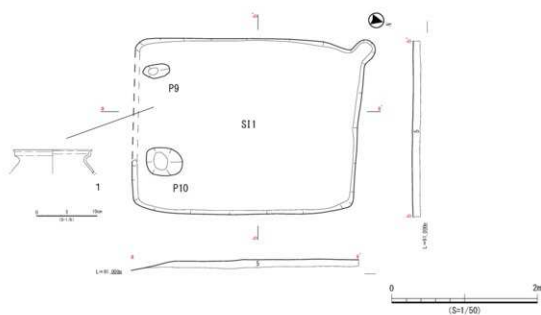


図13 S11 遺構平面図・土層断面図・遺物出土位置図

層名	土質・土色	備考
1層	Ku2 S13/2黒褐色粘質土 しまり強い 粘性あり	藤土
2層	Ku10192/1黒褐色粘質土 しまりやや強い 粘性あり	P1埋土
3層	Ku10194/2灰黄褐色粘質土 しまりやや強い 粘性あり	S1埋土
4層	Ku10192/2黒褐色粘質土 しまり強い 粘性あり(2~5cmの層を省略)	P9埋土
5層	Ku10192/1黒褐色粘質土 しまり強い 粘性あり	S11埋土
6層	Ku10192/3黒褐色粘質土 しまり強い 粘性あり	地山



## ピット

S11の支柱痕を除き、合計で8基(P1~P8)検出した。P2、P5~P8から土師器の小片が出土しているほか、P5、P7~8で須恵器の小片が出土している。遺物が小片のため、各ピットの所属年代については不明である。また、P3~4に同じ埋土(灰黄褐色粘質土)が堆積していることから、P3~4は埋没した時期が近いと思われる。

## SD1

調査区の西端で、南東から北西方向にかけて伸びる溝を1条検出した。長さ約4m、幅0.3mで、深さは0.1mを測るが、調査区外へと延びており全体像は不明である。SD1からは土師器の小片が出土している。遺物が小片のため、SD1の年代は不明であるが、P3~4と同じ埋土(灰黄褐色粘質土)が堆積していることから、P3~4と埋没した時期が近いとみられる。

## (3) 出土遺物(図14、表5~6)

今回の調査で出土した遺物はS11からの出土遺物が占めており、そのほとんどが破片である。これらの中から、残存状況の良い4点を選び、図化した。またP9から土師器の甕が出土しており、それについても図化した。

## 土師器

1~2は、受口状口縁を持つ甕の口縁部で、口縁部の半分および口縁部より下は失われている。口縁部を外反させて調整を行っていることから、古墳時代前期のものとみられる。摩耗が激しいため、調整について不明である。3は、P9より出土した受口状口縁を持つ甕の口縁部で、小片である。頸部の屈曲があまく立ち上がり小さいことから、近江の土師器の中でも湖北地方に多くみられる、いわゆる「湖北系」に分類され、古墳時代前期に位置付けられる。4は甕の底部とみられ、胴部より上は失われている。

## 2 II区

## (1) 層序

現地表面からI層：耕土、II層：黒褐色粘質土の順に堆積している。I区の調査において、II層の上面(検出面積高：L=91.2m)で遺構を検出したことから、I区と同様にこの面で遺構の検出に努めた。

## (2) 検出した遺構(図15~16)

## SD2

調査区の南側において、南西から北東方向にかけて伸びる溝を1条検出した。長さ約1.5m、幅1.8mで、深さは0.15mを測るが、調査区外へと伸びており全体像は不明である。また幅1.8mに対し、深さが0.15mしかないことから、上方の削平行為が想定される。II区で出土した遺物のほとんどが、ここから出土している。出土遺物には、土師器の鉢、甕、甔、高環など古墳時代中期の遺物が多いことから、SD2の年代は古墳時代中期と考えられる。

## SD3

調査区の北側において、北西から東かけて伸びる溝を1条検出した。長さ3.1m、幅0.7mで深さは0.2mである。深さが0.2mしかないことから、SD2と同様に上方の削平行為が想定される。SD3からは遺物が出土せず、年代は不明である。

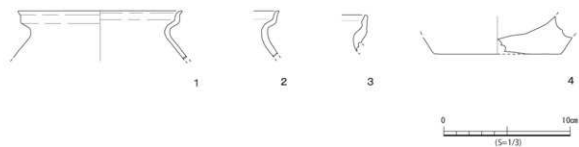


図 14 黒戸遺跡 (I区) 出土遺物

表 5 黒戸遺跡 (I区) 出土遺物観察表

遺物番号	出土位置	種別	器種	破片数	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)	焼成	胎土	色調
1	S11	土師器	甕	5	[13.0]	—	(3.9)	30	やや軟	やや粗	黄褐色
2	S11	土師器	甕	1	—	—	(3.7)	9	軟	粗	褐色
3	P9	土師器	甕	1	—	—	(2.9)	11	軟	やや粗	にぶい褐色
4	S11	土師器	甕	1	—	[10.0]	(3.0)	100	軟	粗	黄褐色

※( ): 残存値 [ ]: 復元値

表 6 黒戸遺跡 (I区) 出土遺物計測表

出土位置	種別	器種・部位	破片数	接合体破片数	重量 (g)
S11	土師器	口縁部	11	10	61
S11	土師器	体部	67	62	466
S11	土師器	底部	5	3	42
S11	土師器	甕・口縁部	6	2	39
S11	土師器	甕・底部	1	1	100
S11	土師器	小片	582	582	1410
P2	土師器	小片	3	3	3
P5	土師器	小片	5	5	12
P6	土師器	小片	5	5	11
P7	土師器	小片	11	11	83
P8	土師器	底部	1	1	17
P8	土師器	小片	14	14	47
P9	土師器	口縁部	2	2	15
P9	土師器	小片	40	40	66
P10	土師器	小片	3	3	4
その他	土師器	底部	1	1	22
その他	土師器	小片	10	10	22
S11	須恵器	小片	2	2	15
P5	須恵器	小片	2	2	23
P7	須恵器	小片	1	1	4
P8	須恵器	小片	3	3	39
総量			775	763	2500

(実測遺物含む)

## ビット

4基(P11~14)のビットを検出したが、出土遺物はなく詳細は不明である。

## (3) 出土遺物(図17,表7~8)

S D 2からは土師器が多く出土した。それらのほとんどが破片であったが、この中から特に残りが良いものを中心に16点を選び、図化した。

## 土師器

1~2は土師器の鉢である。1は外面内面ともにナデ調整が施され、外面の胴部にはユビオサエも見られる。2は外面にナデ調整と、胴部にはユビオサエが見られる。内面はヘラケズリが施されている。

3~9は土師器の甕である。3は頸部から口縁端部にかけて外反している。外面の頸部にはハケメが見られる。4は3と同様に頸部から口縁端部にかけて外反するつくりになっている。外面内面ともにハケメ調整が見られる。5は外面にナデ調整が見られる。胎土はやや粗く、1~3mm程度の小石を多く含む。6は内面の頸部から口縁部にかけてナデ調整が見られる。胎土は粗く、1~3mm程度の小石を多く含む。7は頸部から口縁端部にかけて外反しており、外面にはナデ調整が見られる。1~4mm程度の小石を多く含む。8は外面にハケメ調整が見られる。内面は口縁部と頸部で色調が多少異なる。1~3mm程度の小石を多く含む。9は受口状の口縁をしており、端部は平皿に処理がしてある。焼成が甘く、外面と内面で色調が大きく異なる。1~4mm程度の小石を多く含む。

10~12は土師器の甕である。10は頸部から口縁端部にかけて外反するつくりになっており、口縁端部は丸みを帯びている。外面内面ともに劣化が激しい。11は土師器ではあるものの、器種の特定には至らなかった。1~3mm程度の小石を多く含む。12は土師器の甕である。残存しているのは底の部分であり、外側から孔を開けた痕が見られる。外面内面ともにユビオサエが施されている。

13~16は土師器の高坏である。13は脚部の一部が残存しており、外面にはミガキ痕がみられる。14は脚部が残存しており、内面にユビオサエが施されている。胎土はやや粗く、1~3mm程度の小石を含む。15は脚部と坏部の一部が残存している。焼成が甘く、全体的に劣化が激しい。16は14と同様に脚部が残存している。胎土はやや粗く、1~3mm程度の小石を多く含む。

## 参考文献

山下 優介 2020 「近江地域北部の弥生時代後期から古墳時代前期の土器編年—器台形土器を中心とした検討—」『東京大学考古学研究室研究紀要 第33号』,東京大学考古学研究室。

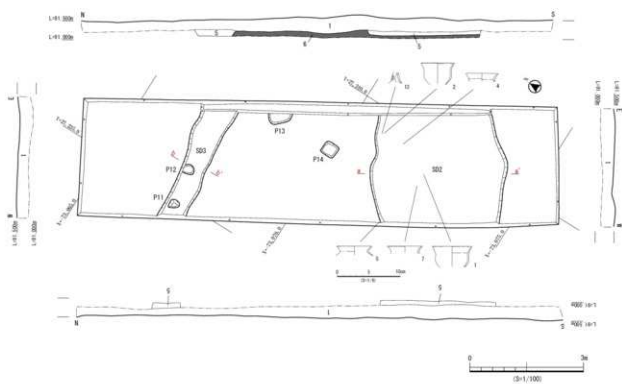


図15 黒戸遺跡（Ⅱ区）遺構平面図・土層断面図

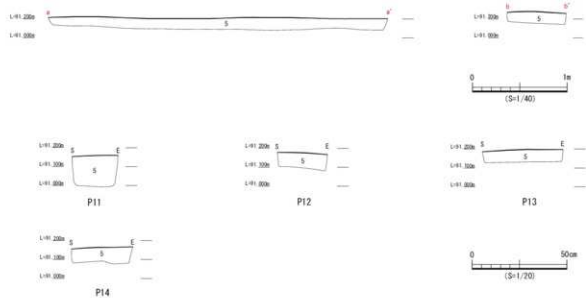


図16 SD2～3・P11～14 土層断面図

層名	土質・土色	備考
1層	Hu2 5Y3/2黒褐色粘質土	しまり弱い 粘性あり
2層	Hu10Y2/1黒褐色粘質土	しまりやや強い 粘性あり
3層	Hu10Y2/1黒褐色粘質土	しまり弱い 粘性あり
4層	Hu10Y2/2黒褐色粘質土	しまり強い 粘性あり
		SD2～3, P11～14 埋土

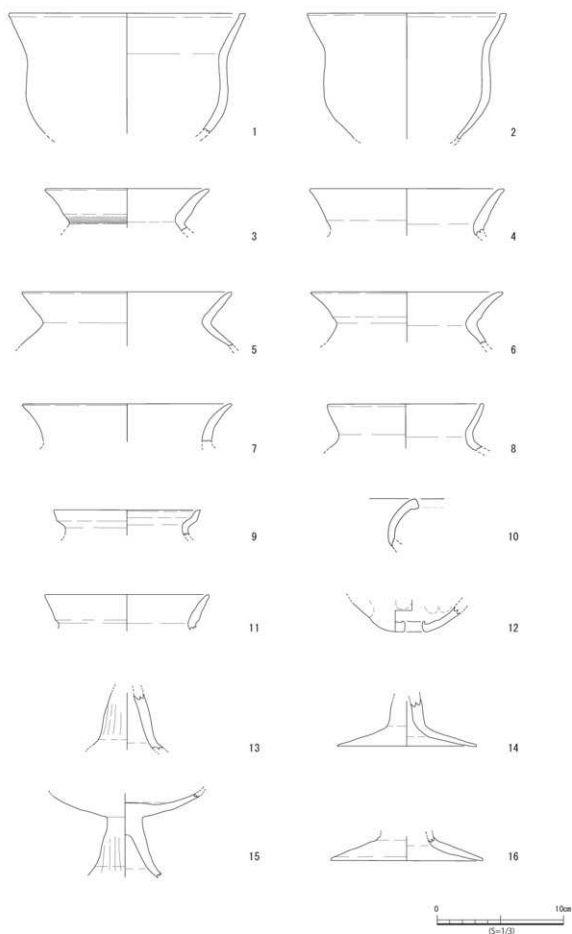


图17 藤戸遺跡(Ⅱ区)出土遺物

表7 願戸遺跡(Ⅱ区) 出土遺物観察表

遺物番号	出土位置	種別	器種	破片数	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)	焼成	胎土	色調
1	S02	土師器	鉢	3	(18.8)	—	(9.5)	148	敷	やや粗	外: 紅み黄褐色 内: 淡黄褐色
2	S02	土師器	鉢	18	(15.4)	—	(9.9)	139	敷	やや粗	外: 紅み黄褐色 内: 淡黄褐色
3	S02	土師器	壺	1	(13.0)	—	(2.0)	19	敷	やや粗	褐色
4	S02	土師器	壺	2	(15.4)	—	(3.7)	16	敷	粗	褐色
5	S02	土師器	壺	4	(16.6)	—	(4.3)	26	敷	やや粗	褐色
6	S02	土師器	壺	1	(15.2)	—	(4.1)	19	敷	粗	外: 明赤褐色 内: 褐色
7	S02	土師器	壺	1	(16.6)	—	(3.0)	38	敷	粗	外: 明赤褐色 内: 褐色
8	S02	土師器	壺	1	(12.3)	—	(3.7)	17	敷	粗	外: 褐色 内: 明赤褐色
9	S02	土師器	壺	1	(11.6)	—	(3.7)	11	敷	粗	外: 明赤褐色 内: 褐色
10	S02	土師器	甌	1	—	—	(3.8)	17	敷	粗	外: 淡黄褐色 内: 灰白色
11	S02	土師器	不明	1	(12.8)	—	(2.7)	11	やや敷	やや粗	紅み黄褐色
12	S02	土師器	甌	4	—	—	(2.3)	60	やや敷	やや粗	紅み黄褐色
13	S02	土師器	高坪	1	—	—	(4.3)	52	敷	やや粗	外: 褐色 内: 紅み黄褐色
14	S02	土師器	高坪	2	—	(11.0)	(3.7)	32	敷	やや粗	外: 紅み黄褐色 内: 褐色
15	S02	土師器	高坪	3	—	—	(6.7)	114	敷	粗	淡黄褐色
16	S02	土師器	高坪	1	—	(12.0)	(2.0)	23	やや敷	やや粗	外: 褐色 内: 紅み黄褐色

※( ): 残存値 [ ]: 復元値

表8 願戸遺跡(Ⅱ区) 出土遺物計測表

出土位置	種別	部位	破片数	重量 (g)
S02	土師器	口縁部	42	512
S02	土師器	脚部	7	152
S02	土師器	台部	2	154
S02	土師器	小片	179	735
総量			230	1553

(実測遺物含む)

## 第5章 高溝遺跡の調査

## —第4次調査—

調査地点	滋賀県米原市高溝 785
調査原因	市道顔戸・八田羽織線道路改良工事
試掘調査期間	I区(T1～5)：令和元年10月23日 II区(T6～9)：令和3年10月21日 III区(T10～20)：令和4年11月1日～2日
発掘調査期間	令和4年5月10日～6月13日
整理作業期間	令和4年6月15日～令和5年7月26日
調査面積	84.75㎡
処置	調査終了後工事を許可
調査成果	沼跡、ピット3基 土師器、須恵器などコンテナ2箱分出土



図18 高溝遺跡の範囲と本調査位置

## 第1節 調査の経過(図18)

市道顔戸・八田羽織線道路改良工事に伴い、高溝遺跡の範囲内において、令和元年(2019年)10月23日に5か所のトレンチ(T1～5)、令和3年(2021年)10月21日に4か所のトレンチ(T6～9)を設定し、試掘調査を実施した。T6、T8において、遺構・遺物が確認されたことから、発掘調査を実施する運びとなった。

発掘調査は、令和4年(2022年)5月10日から6月13日までの期間で調査を完了した。調査面積は84.75㎡で、実働13日の調査期間を要した。その後本調査区の北側において、令和4年11月1日から2日にかけて、計11か所のトレンチ(T10～20)を設定して試掘調査を行ったが、遺構・遺物共に確認されなかったことから、現地での調査を終了した。現地での調査終了後、令和4年6月15日から令和5年(2023年)7月26日にかけて整理作業を実施した。

今回の調査では、弥生時代から古代に至るまで存続したとみられる沼跡を検出した。今回出土した遺物のほぼ全てがこの沼跡から出土したもので、弥生土器や古墳時代の土師器・須恵器、古代の須恵器、平瓦の小片、モモ核などが出土している。

また、中学生の職場体験の一環として、令和4年6月8日に米原市立米原中学校の生徒(居藤 紗依、伊藤 良名煌、北村 麗愛、澁谷 峻、振角 奈那)、令和5年6月29日に米原市立大東中学校の生徒(杉野 美月、MIGUEL DE BARROS SATO)、令和5年7月5日に米原市立双葉中学校の生徒(高田 華実、杉山 あかり、時田 倫那)が遺物整理作業に参加し、高溝遺跡から出土した遺物の洗浄と接合を行った。

なお、今回の調査成果について、令和4年8月6日から9月25日にかけて、「顔戸遺跡群発掘調査速報展」と題して、米原市近江川にお堀にて一般公開を行った。また、『米原市文化財ニュース 佐加太 第52号』(令和5年3月27日発行)において調査成果の概報を掲載すると共に、『広報まいばら Vol.1341』(令和5年6月29日発行)で顔戸遺跡群全体の発掘調査成果を紹介するなど、調査成果の周知を図った。

以下、発掘調査の調査日誌を抄録する。

令和4年(2022年)

- 5月10日 器材の搬入。調査区を設定し、重機による調査区の表土除去を行う
- 5月11日 排水溝の掘削
- 5月12日 調査区(西側半分)を遺構精査
- 5月16日 調査区(東側半分)を遺構精査
- 5月17日 調査区(全体)を遺構精査
- 5月18日 遺構検出状況全景写真撮影。遺構の掘削開始。遺構の断面図および調査区北・西壁の断面図作成  
遺構の土層堆積状況の写真撮影
- 5月19日 調査区東端に幅1mでサブトレンチを設定し、掘削開始。調査区南壁の断面図作成
- 5月20日 サブトレンチの設定および掘削。遺物出土状況の写真撮影
- 5月23日 サブトレンチの掘削
- 5月24日 完掘状況全景写真撮影
- 5月25日 調査区東壁の断面図作成
- 5月26日 遺構平面図の作成。器材の撤収
- 6月13日 調査区の埋め戻し

## 第2節 既往の調査

今回、調査を実施した高溝遺跡は、縄文時代前期から晩期を中心とした集落遺跡として周知されており、これまで第1～3次の計3回にわたって発掘調査が実施されている。第1次調査(昭和61～63年度)は、県営ほ場整備に伴って実施され、縄文時代の遺物包含層のほか、古墳時代の大溝遺構、平安時代の掘立柱建物跡などが検出されている<sup>①</sup>。この調査により縄文時代以降、弥生時代末から古墳時代中期に至るまで、この場所に集落が営まれていたことが明らかとなった。また古墳時代の大溝遺構は、平安時代後期までの条里開墾によって埋められたとみられ、その際に周辺の土と共に縄文時代の土器や石器が、古墳時代や平安時代の遺物と混在した形で大溝内に二次堆積し、出土遺物の複雑な状況を生み出している。

県営灌漑排水事業に伴って実施された第2次調査(平成元年度)では、パイプライン埋設と灌漑排水管理設により南北に長い調査区で設定され、北部で掘立柱建物跡、中央部で条里畦畔、南部で約5m幅の溝が検出された<sup>②</sup>。

個人住宅建設等に伴って実施された第3次調査(平成11年度)では、溝1条と土坑2基、柱穴1基が検出されているが、調査面積に限られること、年代がわかる遺物が出土していないことから遺構の性格は不明である<sup>③</sup>。

3次にわたる調査により、高溝遺跡の性格として、①縄文時代から連続と続く集落があったこと、②弥生時代後期から古墳時代中期におよぶ環壕集落があったこと、③寺院(法勝寺遺跡)の造営時期に南北方位を主軸とする建物を持つ集落があったこと、④平安時代前期以降の条里開墾期に、大溝が埋められると共に、水田管理の建物群が建てられたことが推測されている。

## 注

- 1) 宮崎 幹也1990『高溝遺跡』(近江町文化財調査報告書 第4集)、近江町教育委員会。
- 2) 宮崎 幹也1990『埋塚遺跡』(近江町文化財調査報告書 第8集)、近江町教育委員会。
- 3) 宮崎 幹也2001『近江町埋蔵文化財調査集報3-町内遺跡発掘調査報告書-』(近江町文化財調査報告書 第21集)、近江町教育委員会。



表9 高溝遺跡 調査履歴一覧表

調査回数	調査年度	調査主体	担当者	調査原因	調査面積	所在地	文 献
第1次	昭和44~45年度	近江町教育委員会	宇田進士	県営はまき池掘削事業	約4,500㎡	滋賀県米原市高溝 地先	近江町文化財調査報告書 第4巻、高溝遺跡
第2次	平成元年年度	近江町教育委員会	宮崎幹也	県営蓮根砂水事業	約840㎡	滋賀県米原市高溝 地先	近江町文化財調査報告書 第4巻、高溝遺跡
第3次	平成11年度	近江町教育委員会	宮崎幹也	個人住宅建設等	約60㎡	滋賀県米原市高溝 地先	近江町文化財調査報告書 第4巻、高溝遺跡 近江町教育委員会 文化財調査報告書第4巻

### 第3節 試掘調査の成果(図19)

#### (1) 層序および検出した遺構

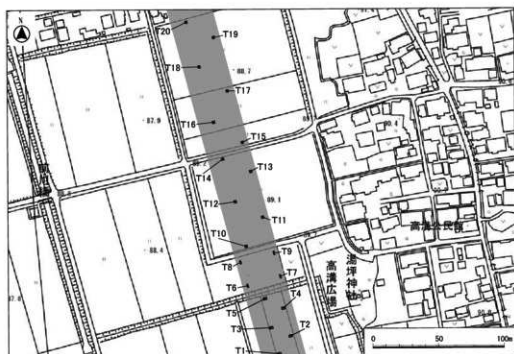
工事の進捗状況の関係で、工事予定地をⅠ区～Ⅲ区の3つに区分し試掘調査を行った。Ⅰ区は、令和元年(2019年)10月23日に試掘調査を実施し、道路改良工事予定地内に2m×3mの試掘トレンチを5か所(T1～5)設定して、土層堆積状況の確認および遺構・遺物の検出に努めた。なお、試掘調査は重機を用いて掘削作業を行った。各トレンチの基本層序は以下のとおりである。

- T 1 掘削深度はGL=-1.4mで、層序は現地表面よりⅠ層：耕土(50cm)、Ⅱ層：暗緑灰色砂質土(90cm)であった。
- T 2 掘削深度はGL=-1.35mで、層序は現地表面よりⅠ層：耕土(40cm)、Ⅱ層：にぶい黄褐色砂礫層(10cm)、Ⅲ層：暗緑灰色砂質土(85cm)であった。
- T 3 掘削深度はGL=-1.4mで、層序は現地表面よりⅠ層：耕土(20cm)、Ⅱ層：灰色砂質土(40cm)、Ⅲ層：暗緑灰色砂質土(80cm)であった。
- T 4 掘削深度はGL=-1.3mで、層序は現地表面よりⅠ層：耕土(30cm)、Ⅱ層：にぶい黄褐色砂礫層(20cm)、Ⅲ層：暗緑灰色砂質土(55cm)、Ⅳ層：にぶい黄色砂質土(25cm)であった。
- T 5 掘削深度はGL=-1.4mで、層序は現地表面よりⅠ層：耕土(20cm)、Ⅱ層：にぶい黄褐色砂礫層(20cm)、Ⅲ層：暗緑灰色砂質土(50cm)、Ⅳ層：にぶい黄色砂質土(50cm)であった。

遺構、遺物の確認には至らなかったため、掘削作業を終了した。掘削作業後は土層堆積状況を観察し、柱状図を作成した。また調査中は、適時写真撮影を行った。記録作業後は、調査地を現状に復して調査を終了した。

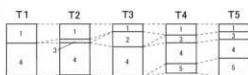
Ⅱ区は、令和3年10月16日に試掘調査を実施し、道路改良工事予定地内に1m×3mの試掘トレンチを4か所(T6～9)設定して、土層堆積状況の確認および遺構・遺物の検出に努めた。なお、試掘調査は重機を用いて掘削作業を行った。各トレンチの基本層序は以下のとおりである。

- T 6 掘削深度はGL=-0.8mで、層序は、現地表面よりⅠ層：耕土(25cm)、Ⅱ層：黒褐色砂質土(17cm)、Ⅲ層：灰色粘土(14cm)、Ⅳ層：灰色砂質土(24cm)であった。
- T 7 掘削深度はGL=-0.83mで、層序は、現地表面よりⅠ層：耕土(9cm)、Ⅱ層：黒褐色砂質土(30cm)、Ⅲ層：灰色粘土(7cm)、Ⅳ層：灰色砂質土(13cm)、Ⅴ層：黒褐色粘土(15cm)であった。
- T 8 掘削深度はGL=-0.35mで、層序は、現地表面よりⅠ層：耕土(20cm)、Ⅱ層：黒褐色砂質土(15cm)であった。Ⅱ層の下層に青灰色砂質土が堆積していることを確認した。
- T 9 掘削深度はGL=-0.55mで、層序は、現地表面よりⅠ層：耕土(9cm)、Ⅱ層：黒褐色砂質土(10cm)、Ⅲ層：青灰色砂質土(36cm)であった。



---市道跡戸 - 八田町線新設予定地

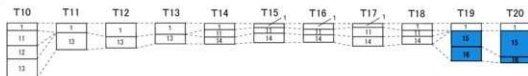
I 区



II 区



III 区



0 3m  
(2:1/100)

層名	土質・土色	備考	層名	土質・土色	備考
1層	Hu2 S12/2 黒褐色粘質土	粘土	9層	Hu10 M3/1 黒褐色粘土	沼
2層	Hu6M/ 灰色砂質土		10層	Hu5 S85/1 青灰色砂質土	
3層	Hu5 F84/4 にぶい黄褐色砂礫層		11層	Hu2 S214/1 緑オリーブ色粘質土	造成土
4層	Hu5 G4/1 緑緑灰色砂質土		12層	Hu2 S186/2 灰黄色粘質土	
5層	Hu2 S16/4 にぶい黄色砂質土(2-bands etc.)		13層	Hu7 S15/1 灰色粘土	
6層	Hu10 M3/3 黒褐色砂質土	造成土	14層	Hu5 S6/1 緑灰色粘土	
7層	Hu6S/ 灰色粘土	沼	15層	Hu10 F4/1 灰色粘質土	沼
8層	Hu6K/ 灰色砂質土(2-bands etc.)	沼	16層	Hu7 S12/1 黒色粘土	沼

図 19 高溝遺跡 試掘トレンチ配置図および柱状図

遺構・遺物について、T6～T7で沼跡を検出した。T6～T7のⅢ層からⅤ層までが沼の堆積とみられ、Ⅳ層より弥生時代から古墳時代にかけての土器が大量に出土した。なお、T8は水路の埋設工事、T9は東に隣接する畑の造成工事による攪乱を受けており、遺構・遺物共に確認することができなかった。試掘調査の結果、T6～T7で遺構・遺物が確認されたことから、本調査の必要ありと判断した。

Ⅲ区は、令和4年11月1日から2日にかけて試掘調査を実施し、道路改良工事予定地内に2m×2mの試掘トレンチを11か所(T10～20)設定して、土層の堆積状況の確認および遺構・遺物の検出に努めた。各トレンチの基本層序は以下の通りである。

- T10 掘削深度は、G L=1.45mで、層序は、現地表面よりⅠ層：黒褐色粘質土(30cm)、Ⅱ層：暗オリーブ色粘質土(40cm)、Ⅲ層：灰黄色粘質土(35cm)、Ⅳ層：灰色粘土(40cm)であった。
- T11～13 最大掘削深度はG L=0.7mで、層序は、現地表面よりⅠ層：黒褐色粘質土(25～30cm)、Ⅱ層：灰色粘土(25～45cm)、であった。
- T14～18 最大掘削深度はG L=0.6mで、層序は、現地表面よりⅠ層：黒褐色粘質土(10～17cm)、Ⅱ層：暗オリーブ色粘質土(15～25cm)、Ⅲ層：緑灰色粘土(20～25cm)であった。
- T19～20 最大掘削深度はG L=1.05mで、層序は現地表面よりⅠ層：黒褐色粘質土(20cm)、Ⅱ層：灰色粘質土(42～60cm)、Ⅲ層：黒色粘土(16～38cm)であった。

T10のⅣ層目(灰色粘土)、T11～T13のⅡ層目(灰色粘土)、T14～T18のⅢ層目(緑灰色粘土)はかなりしまりが強く、またT12においてこの層の上面でピットを確認したことから、この面が遺構面であった可能性が考えられる。しかし、ピットは3cm程度の深さしか残存していないことから、ほ場整備の際にほとんどの遺構が削られたものとみられる。ちなみに、このピットから1cm～2cm大の土師器の小片が出土している。なお、遺構面と想定される層の上面の標高は、T10～14がL=89.368～89.988mで、T15～18がL=88.737～89.043mである。

Ⅲ区においても沼跡が検出され、T19(黒色粘土、検出面標高：L=88.1m)、T20(黒色粘土、検出面標高：L=87.84m)で沼跡とみられる堆積を確認した。Ⅱ区とⅢ区で検出された沼が一体のものかは、今後の調査に期するほかないが、いずれにせよ、高溝集落の西側に沼沢地が広がっていたことが明らかとなった。

## (2) 出土遺物(図20)

試掘調査では土師器と須恵器の破片が出土し、その中でも土師器が多数出土した。これらの中から残りの良いものを6点抽出し、図化した。

### 土師器

主な器種は、甕、壺、碗、高坏である。1は甕で、頸部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がり、口縁端部は丸みを帯びている。外面には回転ナデが施されている。胎土は粗く、約1～3mmの小石を多く含む。

2は土師器の壺で、外面の頸部から口縁部にかけてハケメと刺突文が施されている。内面には工具による調整痕が見られる。器壁は厚い。

3は土師器の有台碗である。高台は外側に向かって緩やかに開くようなつくりになっている。外面内面に回転ナデが見られる。

4～6は土師器の高坏で、4は高坏の坏部に当たる。外面内面に回転ナデが施されている。焼成は甘い。5は高坏の脚部で、外面にはユビオサエが施されており、脚部の端部は平垣を意識して調整されている。6は5と

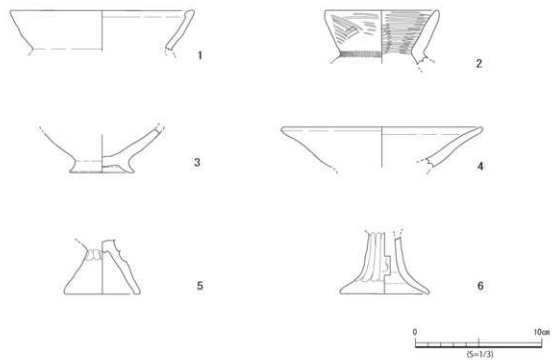


図20 高溝遺跡（試掘調査）出土遺物

表10 高溝遺跡（試掘調査）出土遺物観察表

遺物番号	種別	器種	破片数	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	重量(g)	焼成	胎土	色調
1	土師器	壺	1	[14.6]	—	—	11	やや軟	粗	褐色
2	土師器	壺	1	[9]	—	—	24	やや軟	やや密	外：黒色 内：灰黄褐色
3	土師器	椀	1	—	(5.2)	(3.4)	28	やや軟	粗	にぶい褐色
4	土師器	高坏	1	[16]	—	—	22	軟	やや密	明褐色
5	土師器	高坏	1	—	—	(4.2)	52	やや軟	密	にぶい褐色
6	土師器	高坏	1	—	—	(4.5)	19	軟	やや粗	灰白色

※( )：残存値 [ ]：復元値

表11 高溝遺跡（試掘調査）出土遺物計測表

出土位置	種別	器種・部位	破片数	重量(g)
試掘T7	土師器	小片	51	700
	須恵器	小片	3	22
試掘T6	土師器	小片	17	236
	須恵器	小片	1	96
試掘T8	須恵器	小片	1	9
総量			73	1063

(実測遺物含む)

同様に脚部に当たり、残存部分の痕跡から透かし孔があったことが分かる。外面内面にミガキが施されている。焼成は甘い。

#### 第4節 発掘調査の成果

##### (1) 層序

現地表面からⅠ：耕土、Ⅱ：造成土と続き、その下層に沼跡（検出面標高：L=88.1m）が広がっている。試掘調査において、沼とみられる堆積と遺物を確認したことから、本調査では沼の広がりや堆積状況、そして沼の存続年代の確認を目的として調査を実施した。

##### (2) 検出した遺構（図21、表10～11）

###### 沼跡

今回、調査区の全面で沼跡が検出された。調査区の中央を分断する形で、南北方向に暗渠排水が設置されていることから、沼跡全体の掘削を行うことができず、調査区の東端にサブトレンチを設けて、堆積状況を確認した。

この沼跡は下層から、第Ⅲ層：黒褐色砂礫層（図21-5層）、第Ⅱ層：黒褐色粘質土（図21-4層）、第Ⅰ層は黒褐色粘土（図21-3層）の順に堆積していた。第Ⅲ層では遺物は出土しなかったが、第Ⅱ層から弥生時代後半から古墳時代前半にかけての土器が多く出土し、第Ⅰ層から古墳時代前半から古代にかけての土器が多く出土している。

沼跡の堆積が3層に分層できる一方で、出土遺物は層ごとにある程度の年代のまとまりが見いだせるものの、きれいに年代を分けることができないことから、時間をかけて自然にゆっくりと埋まっていったとみられ、最終的には、古代に入ってから人工的に埋められ廃絶したとみられる。

###### ピット

沼跡の第Ⅰ層（図21-3層）の上面において3基（P1～P3）を検出した。ピット間に距離があることから、別々の建物とみられる。これらのピットから遺物は出土しなかったが、沼跡の上面に設けられていることから、沼が廃絶した古代以降に設けられたと推測される。ピットのほかにも土坑も検出されたが、埋土からプラスチック片が出土しており現代の擾乱と判断した。

##### (3) 出土遺物（図22～24、表12～13）

沼跡からは縄文土器や瓦、須恵器や土師器が出土しており、それらのほとんどが破片であった。この中から特に残りが良いものを46点抽出し、図化した。

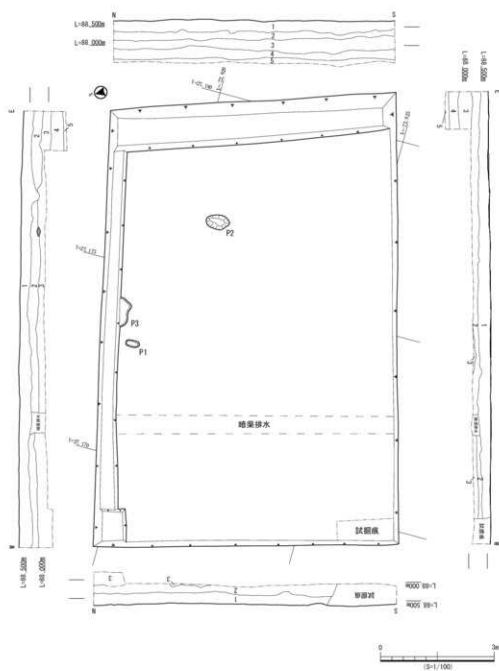
###### 縄文土器

- 1は縄文土器の小片である。突帯が見られることから、縄文時代晩期のものと考えられる。

###### 土師器

- 土師器は甕や壺、鉢、碗、高杯を中心に、古墳前期から中期にかけてのものが出土している。

2～22は土師器の甕である。2は受口状の口縁を有し、端部はやや丸みを帯びている。外面の頸部から胴部にかけて文様が施されている。胎土はやや粗い。3は器壁が分厚く、口縁は端部にかけて外反しており、口縁端部は丸みを帯びている。胎土はやや粗く、1～3mm程度の小石を含む。4は外面内面にナデ調整が見られる。器壁は薄く、胎土はやや粗い。5の内面にはハケメ調整が見られ、2つの単位のハケメが重なっている。口縁部は



層名	土質・土色	備考
1層	Hu2.513/2 黒褐色砂質土	雑土
2層	Hu1093/3 黒褐色砂質土	造成土
3層	Hu1092/1 黒褐色粘土	道(第1層)
4層	Hu5192/1 黒褐色粘質土(5mm~10cmの礫を含む・木を含む)	道(第2層)
5層	Hu2.5072/1 黒褐色砂質土(5mm~5cmの礫を含む)	道(第3層)
6層	Hu1093/1 黒褐色粘質土	ピット

図21 高溝遺跡 遺構平面図・土層断面図

やや外傾している。色調は明赤褐色で、胎土はやや粗い。6は口縁が四分の一ほど残存している。外面内面共に表面が割れてしまっており、特に口縁部分の残りが悪い。焼成はやや甘い。7の口縁は受口状であるものの、口縁部分の残りが悪い。口縁部から頸部にかけて、外面に文様が施されている。胎土はやや粗く、焼成もやや甘い。8は外面に棒状結束具による調整痕が見られる。胎土がやや粗く、1～3mm程度の小石を含む。9は口縁が八分の一ほど残存している。外面に棒状結束具による調整痕が見られる。1～5mm程度の小石を多く含む。胎土はやや粗く、色調はにぶい橙色を呈する。10は端部から口縁部にかけて外反する。外面内面共にナデ調整が見られる。11は口縁端部にかけてやや内反しながら立ち上がる。器壁は薄く、焼成は堅緻である。12は頸部から口縁端部にかけてやや膨らみをもって立ち上がる。胎土は密で1mm程の小石を多く含む。13の口縁はやや内反しながら緩やかに立ち上がる。外面内面共にナデ調整が見られる。14の口縁端部は平坦面を持ち、外面内面共にナデ調整が見られる。1～3mm程度の小石を含み、焼成はやや甘い。15の口縁は受口状で、端部は平坦面を持つ。外面の頸部から胴部にかけて文様が施されている。焼成はやや甘く、胎土は粗い。16は頸部から口縁端部にかけて外反している。胎土は粗く、にぶい橙である。約1～4mm程度の小石を多く含む。17は口縁が四分の一程度残存している。器壁が分厚く、口縁は端部にかけて外反している。焼成はやや甘い。18は口縁端部を折り曲げて調整している。胎土は粗く、1～5mm程度の小石を多く含む。19は18と同様に口縁端部を折り曲げて調整している。胎土はやや粗く、焼成が甘い。20は口縁が四分の一程度残存している。外面内面共にナデ調整が見られるが、特に外面の調整は強く出ている。口縁端部に平坦面が見られる。21は頸部から口縁端部にかけて外反している。口縁端部は丸みを帯びており、胎土はやや粗い。22は口縁が受口状である。胎土、焼成共に甘く、色調はにぶい橙色を呈する。

23～25は土師器の甕である。23は外面内面共にハケメ調整が見られる。焼成はやや甘い。24は外面内面共にナデ調整が見られる。口縁はやや丸みを帯びており、頸部から口縁端部にかけて外反している。頸部内面が割れている。25の口縁は欠けておらず、今回掲載する遺物の中で最も残りが良い。内面にハケメ調整あり。焼成はやや甘い。

26・27は土師器の鉢である。26は内面にハケメ調整が見られる。口縁部を体部に付けることで成形したと考えられる。焼成はやや甘い。27は外面に棒状結束具による調整痕とハケメ調整が見られ、頸部から口縁にかけて膨らみを持たせている。

28～30は土師器の椀である。28は外側の一部にハケメ調整が見られる。器壁が薄く、焼成はやや甘い。29は28よりも器壁が厚く、1～2mm程度の小石を含む。30の口縁端部は丸みを帯びており、端部にかけてやや外反している。外面の頸部には突起が見られる。焼成はやや甘く、1～3mm程度の小石を含む。

31～35は土師器の高杯である。31は坏部のみ残存している。外面にハケメ調整が見られ、2種のハケメが重なっている。32～34は脚部のみ残存している。32はハの字状に外反しており、外面にのみミガキ痕が残る。33は32と同様にハの字状の外反が見られ、外面にはエビスアサエが施されている。かつ残存部分の痕跡から透かし孔があったことが分かる。34は外面内面共にミガキ痕があり、外面にはハケメ調整も確認できる。35は高杯の坏部で、外面内面共にハケメ調整が見られる。焼成のムラによって外面の色調にばらつきがある。

36・37は土師器ではあるものの小片であったため、器種の特定には至らなかった。

## 須惠器

須惠器は甕や坏身、坏蓋、甕、器台が出土し、ほとんどが6世紀前半から7世紀前半頃のものと考えられる。38は甕の胴部とみられ、ハケメが施されている。また、表面に粒状の黒色粒子が溶け出している。

39～41は坏身である。39と40はどちらも口縁が端部にかけて内傾気味に立ち上がる。40は残りが悪く口縁部

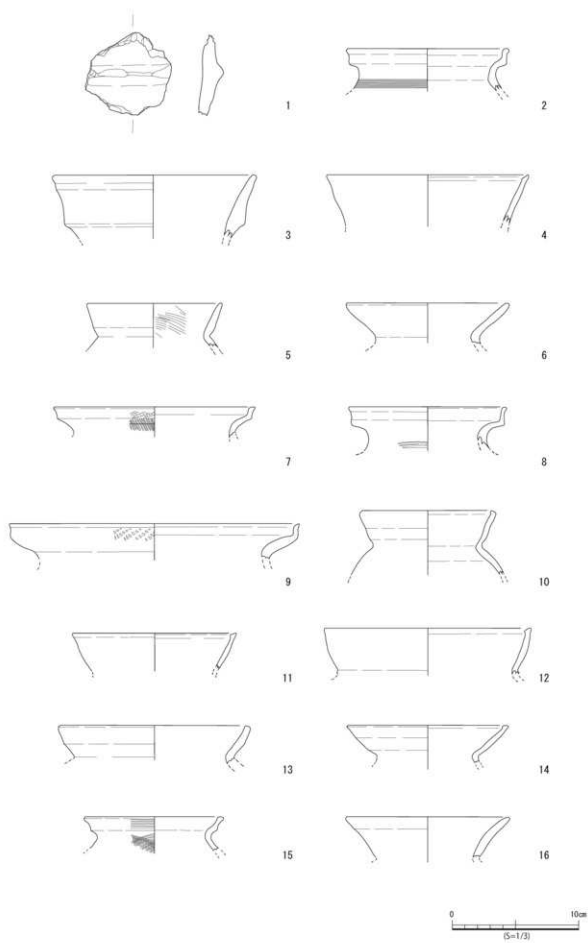


图 22 高溝遺跡 出土遺物 (1)



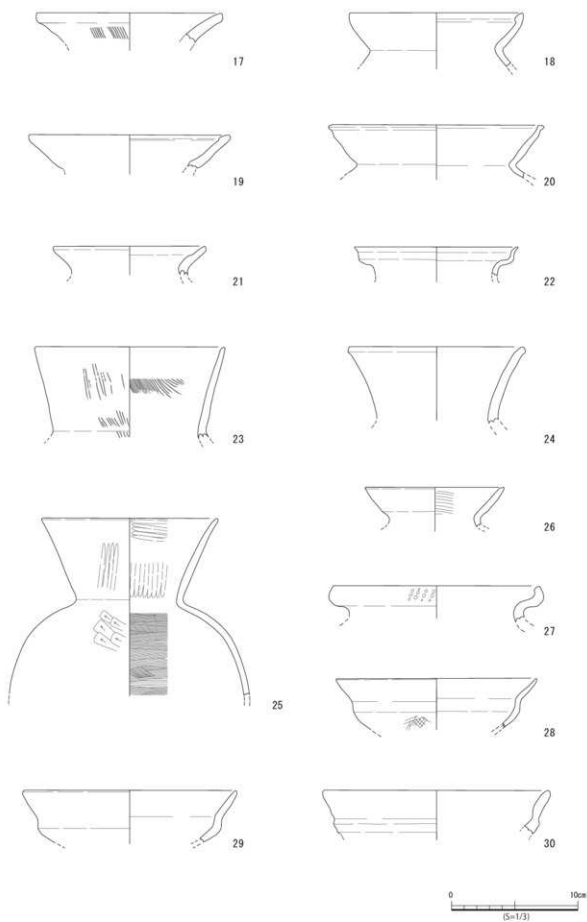


图 23 高溝遺跡 出土遺物 (2)

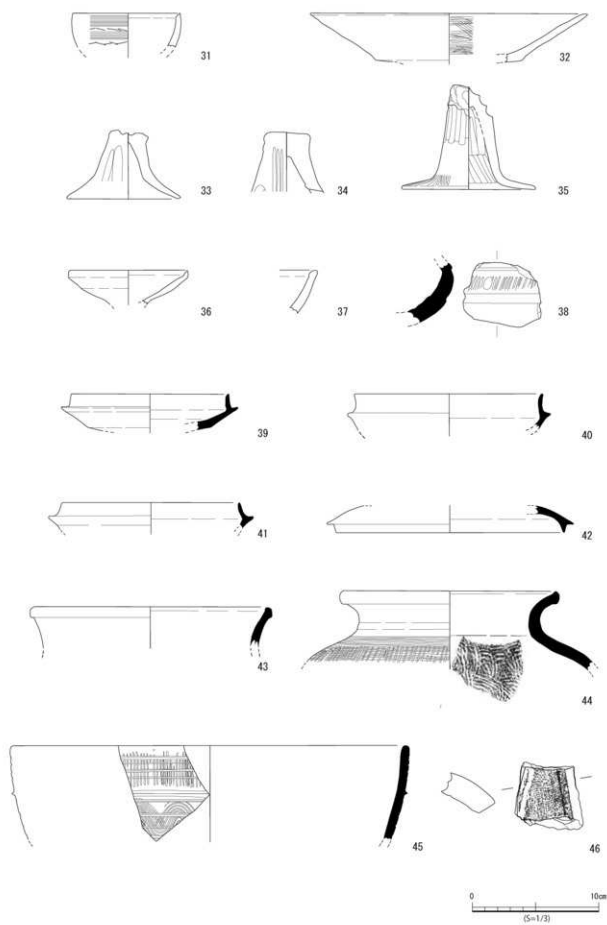


图24 高溝遺跡 出土遺物(3)

表 12 高溝遺跡 出土遺物観察表

遺物番号	種別	器種	破片数	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)	焼成	胎土	色調
1	縄文土器	小片	1	—	—	—	59	敷	粗	灰白色
2	土師器	甕	1	[12]	—	—	18	堅緻	やや粗	にぶい黄褐色
3	土師器	甕	1	[17.8]	—	—	31	堅緻	やや粗	外: 淡黄色 内: 灰黄色
4	土師器	甕	1	[16]	—	—	25	堅緻	やや粗	外: 黒 内: にぶい褐色
5	土師器	甕	1	[10.4]	—	—	8	堅緻	やや粗	明赤褐色
6	土師器	甕	1	[12.4]	—	—	29	やや軟	やや粗	にぶい黄褐色
7	土師器	甕	1	[17.8]	—	—	11	やや軟	やや粗	外: 黒色 内: 灰黄色
8	土師器	甕	1	[12.4]	—	—	12	堅緻	やや粗	淡黄色
9	土師器	甕	1	[23]	—	—	24	やや軟	やや粗	にぶい褐色
10	土師器	甕	1	[10.6]	—	—	24	堅緻	やや粗	にぶい黄褐色
11	土師器	甕	1	[13]	—	—	11	堅緻	密	淡黄色
12	土師器	甕	1	[16.4]	—	—	16	堅緻	密	外: 灰黄色 内: 淡黄色
13	土師器	甕	1	[15]	—	—	14	やや軟	やや粗	外: 黒色 内: 灰黄色
14	土師器	甕	1	[12.6]	—	—	13	やや軟	やや粗	外: 黒色 内: にぶい褐色
15	土師器	甕	1	[11.2]	—	—	9	やや軟	粗	外: 褐色 内: 褐灰色
16	土師器	甕	1	[13]	—	—	22	敷	やや粗	にぶい褐色
17	土師器	甕	1	[14.8]	—	—	28	やや軟	密	外: にぶい褐色 内: 黒褐色
18	土師器	甕	1	[13.8]	—	—	22	敷	やや粗	にぶい褐色
19	土師器	甕	2	[16]	—	—	21	敷	やや粗	外: にぶい黄褐色 内: 灰白色
20	土師器	甕	1	[17]	—	—	24	やや堅緻	やや粗	外: 黒色 内: にぶい灰黄色
21	土師器	甕	1	[12]	—	—	15	堅緻	やや粗	灰白色
22	土師器	甕	1	[13]	—	—	5	敷	粗	にぶい褐色
23	土師器	壺	1	[17]	—	—	52	やや軟	密	にぶい褐色
24	土師器	壺	1	[14]	—	—	28	やや堅緻	やや粗	外: にぶい褐色 内: 明褐灰色
25	土師器	壺	11	[14]	—	—	271	やや軟	やや粗	外: にぶい黄褐色 内: 明赤褐色
26	土師器	鉢	1	[11]	—	—	7	やや軟	やや密	外: 灰黄褐色 内: 灰黄色
27	土師器	鉢	1	[16.2]	—	—	13	敷	粗	にぶい褐色
28	土師器	碗	1	[16]	—	—	9	やや軟	やや粗	褐灰色
29	土師器	碗	2	[16.8]	—	—	21	やや堅緻	やや粗	黒褐色
30	土師器	碗	1	[19.8]	—	—	25	やや軟	やや粗	外: 褐灰色 内: 灰黄色
31	土師器	高坏	1	[8.8]	—	—	8	やや軟	密	灰黄褐色
32	土師器	高坏	3	[22]	—	—	42	やや軟	やや粗	にぶい褐色
33	土師器	高坏	1	—	[9]	—	88	堅緻	密	外: にぶい褐色 内: 明褐灰色
34	土師器	高坏	1	—	—	(4.7)	102	堅緻	密	外: 褐色 内: にぶい褐色
35	土師器	高坏	1	—	—	(8)	144	やや軟	やや粗	灰黄色
36	土師器	小片	1	[11]	—	—	11	やや軟	やや密	にぶい褐色
37	土師器	小片	1	—	—	—	10	やや軟	密	にぶい黄褐色
38	須恵器	皿	1	—	—	—	47	堅緻	やや密	外: 褐灰色 内: 灰色
39	須恵器	坏身	1	[12.4]	—	—	7	堅緻	密	灰色

※〔 〕: 残存値 [ ]: 復元値

遺物番号	種別	器種	破片数	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)	焼成	胎土	色調
40	須恵器	坏身	1	[16.2]	—	—	9	堅緻	密	青灰色
41	須恵器	坏身	1	[14]	—	—	11	軟	密	灰色
42	須恵器	蓋	1	[18]	—	—	18	堅緻	密	灰白色
43	須恵器	壺	1	[19]	—	—	29	堅緻	密	灰白色
44	須恵器	壺	1	[16.7]	—	—	156	堅緻	密	灰色
45	須恵器	器台	1	[62]	—	—	47	堅緻	密	灰色
46	瓦	平瓦	1	—	—	—	51	やや軟	やや密	外: 補灰色 内: 黄灰色

※〔 〕: 復元値

表 13 高溝遺跡 出土遺物計測表

出土位置	種別	器種・部位	破片数	重量 (g)	
1,2層	土師器	小片	41	244	
	須恵器	小片	2	7	
	陶器	天目茶碗高台	1	22	
	磁器	小片	4	18	
3層	縄文土器	小片	1	59	
	土師器	小片	1725	10022	
	須恵器	小片	33	552	
		坏身	2	13	
		器台	1	47	
		瓦	平瓦	1	51
	陶質土器	小片	1	47	
4層	陶器	天目茶碗口縁部	1	3	
		小片	1	4	
	磁器	小片	1	9	
	土師器	小片	258	1707	
	須恵器	坏身	1	7	
		蓋	1	18	
5層	土師器	小片	2	13	
6層	土師器	小片	127	520	
	須恵器	小片	4	103	
その他	土師器	小片	354	2393	
	須恵器	小片	24	284	
		坏身	1	18	
	陶器	奈良火鉢口縁部	1	22	
		天目茶碗高台	1	18	
	磁器	小片	3	26	
		天目茶碗高台	1	22	
総量			2593	16249	

(東瀬遺物倉7)

のみ残存している。41は口縁部の立ち上がりがやや短く、かつ内傾している。

42は坏蓋である。前段階の坏身を逆転させたような形態をしている。

43・44は甕である。43の頭部から口縁端部へ強く外反しており、端部は丸みを帯びている。44は口縁部の残存率は低いものの胴部の残りが良く、外面にタタキ痕、内面に当て具痕が確認できる。

45は器台であり、外面に文様が見られる。小片のため詳細は不明であるが、大庭寺遺跡(大庭寺遺跡)で類似する器台の出土事例がある。

## 瓦

46は平瓦で、裏側に布目痕が見られるが、小片のため詳細は不明である。

上記のほかにもモモ核が22個出土している。この詳細については本書の「第6章 高溝遺跡出土種実の同定および年代測定」を参照されたい。

## 参考文献

山下 健介 2020「近江地域北部の弥生時代後期から古墳時代前期の土器編年—器台形土器を中心とした検討—」『東京大学考古学研究室研究紀要 第33号』、東京大学考古学研究室。

中村 浩 1981『和泉陶器の研究—須恵器生産の基礎的考察—』、柏書房。

1993『古墳時代須恵器の編年的研究』、柏書房。

## 第6章 高溝遺跡出土種実の同定および年代測定

バリノ・サーヴェイ株式会社

## はじめに

本分析調査では、高溝遺跡の調査で検出された沼より出土した種実遺体を対象として、種実同定、放射性炭素年代測定を実施し、植物利用と年代にかかる考察の一助とする。

## 1 試料

試料は、沼の第Ⅱ層(図21 4層)、第Ⅰ層(図21 3層)より出土した種実遺体5試料22個である。内訳は、第Ⅱ層(図21 4層)から2個、第Ⅰ層(図21 3層)から20個である。各試料の詳細は、結果とともに表14、表15に示す。

種実同定は、全5試料22個を対象に実施する。放射性炭素年代測定は、米原市教育委員会事務局生涯学習課担当者との協議選択の上、同定された種実遺体のうち、第Ⅱ層(図21 4層)より2点、第Ⅰ層(図21 3層)より7点の、計9点を測定対象とする。

## 2 種実同定

## (1) 分析方法

試料を双眼顕微鏡下で観察し、同定と計測、写真撮影を実施する。同定は、現生標本や中山ほか(2010)、鈴木ほか(2018)等を参考に実施する。結果は、部位・状態別の個数の一覧表と写真図版で示す。

分析後は、第Ⅱ層(図21 4層)より2個、第Ⅰ層(図21 3層)より7個の、計9個の一部を放射性炭素年代測定に供する。残りの試料は常温乾燥後、容器に入れて返却する。

## (2) 結果

種実同定・計測結果を表14に、写真を図26に示す。種実遺体は、全て栽培植物のモモの核に同定された。以下、形態的特徴等を記す。なお、学名は佐竹ほか編(1989)に依拠した。

・モモ (*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属

核(内果皮)は灰褐色、長さ20.5~24.8mm、幅17.6~22.7mm、厚さ14.7~16.4mmのやや扁平な広楕円体、頂部はやや丸いへやや尖る。

基部は切形で中央部に湾入した鱗がある。背面正中線に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、全体として粗いしわ状にみえる。核内面は平滑で、種子1個が入る広卵状の窪みがある。

出土核の保存状態はやや不良で、摩擦等による頂部や背面、表面の欠損等がみられる。また、第Ⅰ層(図21 3層)出土核の一部の背面や腹面にはネズミ類による食痕と考えられる円形状欠損がみられる(図26 9~10)。

出土核は、概ね頂部が殆ど尖らず丸みを帯びることから、金原(1996:2015 などの)基準のA類に似る。一方、20220520-20の核は、残存長28.8mm、残存幅22.7mm、半分厚9.6mmを測り、大型・扁平で頂部がややや尖ることから、B類(金原,1996:2015 などに)似る。

表14 構架同定・計測結果

試料名	層位	分類群	部位	状態	傾斜	長さ(mm)	幅(mm)	年代測定番号	備考	箇所		
2020501F-1	1層(021.3層)	モモ	柱			22.84	19.94	7.97	-	1	半分層	欠損
2020502-1	1層(021.3層)	モモ	窓枠			24.79	20.92	16.12	1	2	側壁一部剥離	やぶれる
2020502-2	1層(021.3層)	モモ	窓枠			23.71	20.09	16.22	-	3		やぶれる
2020502-3	1層(021.3層)	モモ	窓枠			23.55	20.22	15.66	-	4		やぶれる
2020502-4	1層(021.3層)	モモ	窓枠未満	欠損?		24.51	19.02	14.67	-	5	階下部分欠損(欠損?)	やぶれる
2020502-5	1層(021.3層)	モモ	窓枠未満	欠損?		24.00	18.94	15.59	-	6	側壁・前面剥離欠損(剥離?)	やぶれる
2020502-6	1層(021.3層)	モモ	窓枠未満			22.21	18.37	14.91	-	7	側壁一部・前面剥離欠損	やぶれる
2020502-7	1層(021.3層)	モモ	窓枠未満			20.75	15.29	14.22	2	8	表面剥離欠損	剥離
2020502-8	1層(021.3層)	モモ	窓枠未満	欠損		21.64	17.00	14.85	3	9	ネズミ啃食(腐面)	やぶれい
2020502-9	1層(021.3層)	モモ	窓枠未満	欠損		22.68	19.32	16.32	-	10	ネズミ啃食(腐面)	やぶれる
2020502-10	1層(021.3層)	モモ	窓枠未満	欠損		22.77	19.77	16.38	4	11	ネズミ啃食(腐面)	やぶれる
2020502-11	1層(021.3層)	モモ	礎片			25.36	18.91	7.90	5	12	基礎欠損・半分層	欠損
2020502-12	1層(021.3層)	モモ	礎片			20.46	17.56	6.76	-	13	表面剥離・半分層	やぶれい
2020502-13	1層(021.3層)	モモ	礎片			21.57	17.17	6.95	-	14	表面剥離欠損	欠損
2020502-14	1層(021.3層)	モモ	礎片			16.16	18.39	14.85	6	15	約1/3部・下部欠損(劣化部による劣損)	やぶれる
2020502-15	1層(021.3層)	モモ	礎片			16.60	17.04	7.57	-	16	約1/4片	欠損
2020502-16	1層(021.3層)	モモ	礎片			15.78	12.72	8.23	-	17	約1/4片	欠損
2020502-17	1層(021.3層)	モモ	礎片			10.74	15.26	7.72	-	18	約8/8片・頂部	やぶれい
2020502-18	1層(021.3層)	モモ	礎片			21.67	18.97	16.96	-	19	頂部・側面欠損	欠損
2020502-19	1層(021.3層)	モモ	礎片	欠損		24.35	16.87	10.69	7	20	ネズミ啃食(腐面)・基礎欠損	やぶれる
2020502-20	1層(021.4層)	モモ	礎片			23.77	22.67	9.56	8	21	基礎欠損・半分層	欠損
2020502-21	1層(021.4層)	モモ	礎片			24.62	19.93	8.74	9	22	半分層	欠損

注)計測機はデジタルノギスを使用、欠損は該当欄に「?」で示す。

### (3) 考察

沼の第Ⅱ層(0821\_4層)、第Ⅰ層(0821\_3層)より出土した種実遺体は、全て栽培植物のモモの核に同定された。モモは中国で栽培化され、日本に渡来したと考えられており、果実が食用、薬用、呪術・祭祀用の他、観賞用としての利用が想定されている。那須(2014)によれば、モモは、確実な出土記録より、弥生時代以降、水田稲作とともに日本に渡来したと考えられている。古墳時代以降、出土核の形態が多様になり(A~F類; 金原, 1996など)、品種が多様になったことと、弥生時代から古代では呪術・祭祀用としての利用がモモの普及に大きく関わった可能性が指摘されている。古墳時代以降では、観賞用のハナモモの品種もあった可能性が考えられ、古代モモからのDNA抽出が試みられている。江戸時代以降は観賞用としての利用が大きく、明治以降の品種改良によって再び食用としての価値が高くなったことが指摘されている。

沼の第Ⅱ層(0821\_4層)、第Ⅰ層(0821\_3層)より出土したモモ核は、高溝遺跡近辺で栽培されたか、持ち込まれたかは不明であるが、当時の利用が示唆される。また、核は小さくて丸く、20220520-20の核はやや細長くて大きいなど、少なくとも2種類の異なる形態が確認されたことから、複数の系統の利用が推測される。さらに、第Ⅰ層(0821\_3層)の核の一部にはネズミ類による食痕が確認されることから、食害を受けたと推測される。

## 3 放射性炭素年代測定

### (1) 分析方法

試料から小片を切り取り、洗浄したものを乾燥重量で40~50mg程度に調整し、分析試料とする。

塩酸(HCl)により炭酸塩等可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理 AAA: Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1mol/Lである。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonPlus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置(NEC社製)を用いて、<sup>14</sup>Cの計数、<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)、<sup>14</sup>C濃度(<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。 $\delta^{13}C$ は試料炭素の<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定し、標準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での報告に従う(Stuiver & Polach 1977)。また、暦年校正用に一桁目まで表した値も記す。暦年校正に用いるソフトウェアは、OxCal14.4(Bronk, 2009)、校正曲線はIntCal20(Reimer et al., 2020)である。

### (2) 結果・考察

結果を表15、図25に示す。同位体補正を行った値は、No.1が1740±20BP、No.2が1735±20BP、No.3が1700±20BP、No.4が1705±20BP、No.5が1700±20BP、No.6が1715±20BP、No.7が1765±20BP、No.8が1700±20BP、No.9が1720±20BPである。

暦年校正は、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、その後訂正された半減期(<sup>14</sup>Cの半減期5730±40年)を校正するこ



とによって、暦年代に近づける手法である。較正用データセットは、IntCal20(Reimer et al., 2020)を用いる。2 $\sigma$ の値は、No. 1がcalAD217~383、No. 2がcalAD249~402、No. 3がcalAD259~414、No. 4がcalAD258~410、No. 5がcalAD258~412、No. 6がcalAD255~408、No. 7がcalAD236~350、No. 8がcalAD258~413、No. 9がcalAD252~407である。いずれの試料も近接しており、多くの試料は4世紀半ばに分布の中心がみられる。

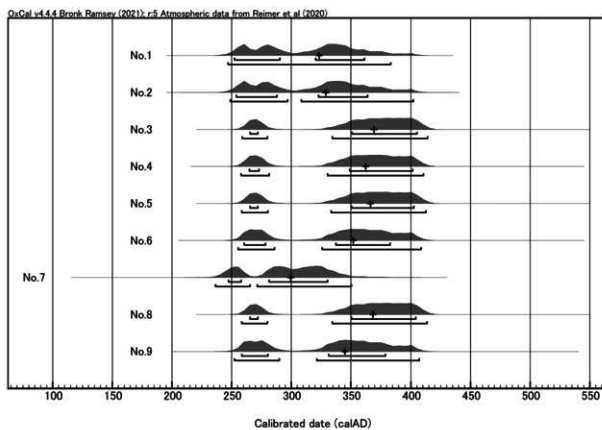


図 25 暦年較正結果

表15 放射性炭素年代測定結果

No.	性状	方法	補正年代 (暦年校正用) BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正年代				Code No.						
					年代値					確率 %					
					$\sigma$	cal	AD	2 $\sigma$							
1	モモ	AAA (1K)	1740±20 (1739±20)	-27.01 ±0.18	$\sigma$	cal	AD	252 - cal	AD	290	1698 - 1660	ca1BP	31.0	YU- 17042	pa1- 14389
						cal	AD	300 - cal	AD	361	1630 - 1589	ca1BP	37.3		
						2 $\sigma$	cal	AD	247 - cal	AD	383	1704 - 1567	ca1BP		
2	モモ	AAA (1K)	1735±20 (1735±21)	-26.31 ±0.21	$\sigma$	cal	AD	254 - cal	AD	288	1697 - 1663	ca1BP	30.0	YU- 17043	pa1- 14390
						cal	AD	249 - cal	AD	297	1702 - 1654	ca1BP	36.2		
						2 $\sigma$	cal	AD	308 - cal	AD	402	1642 - 1549	ca1BP		
3	モモ	AAA (1K)	1700±20 (1699±20)	-27.83 ±0.21	$\sigma$	cal	AD	265 - cal	AD	272	1685 - 1679	ca1BP	6.6	YU- 17044	pa1- 14391
						cal	AD	351 - cal	AD	405	1600 - 1546	ca1BP	61.6		
						2 $\sigma$	cal	AD	259 - cal	AD	280	1692 - 1671	ca1BP		
4	モモ	AAA (1K)	1705±20 (1706±20)	-26.07 ±0.23	$\sigma$	cal	AD	265 - cal	AD	272	1686 - 1678	ca1BP	8.9	YU- 17045	pa1- 14392
						cal	AD	334 - cal	AD	414	1616 - 1537	ca1BP	79.3		
						2 $\sigma$	cal	AD	258 - cal	AD	281	1693 - 1669	ca1BP		
5	モモ	AAA (1K)	1700±20 (1702±20)	-28.03 ±0.21	$\sigma$	cal	AD	265 - cal	AD	272	1685 - 1679	ca1BP	7.1	YU- 17046	pa1- 14393
						cal	AD	350 - cal	AD	402	1600 - 1549	ca1BP	61.1		
						2 $\sigma$	cal	AD	258 - cal	AD	280	1692 - 1670	ca1BP		
6	モモ	AAA (1K)	1715±20 (1716±20)	-28.15 ±0.20	$\sigma$	cal	AD	260 - cal	AD	278	1690 - 1672	ca1BP	19.0	YU- 17047	pa1- 14394
						cal	AD	337 - cal	AD	383	1613 - 1568	ca1BP	49.3		
						2 $\sigma$	cal	AD	255 - cal	AD	286	1695 - 1665	ca1BP		
7	モモ	AAA (1K)	1765±20 (1764±20)	-28.07 ±0.18	$\sigma$	cal	AD	247 - cal	AD	258	1703 - 1693	ca1BP	11.8	YU- 17048	pa1- 14395
						cal	AD	281 - cal	AD	330	1669 - 1620	ca1BP	56.4		
						2 $\sigma$	cal	AD	236 - cal	AD	265	1714 - 1685	ca1BP		
8	モモ	AAA (1K)	1700±20 (1700±20)	-27.71 ±0.25	$\sigma$	cal	AD	271 - cal	AD	250	1679 - 1600	ca1BP	73.8	YU- 17049	pa1- 14396
						cal	AD	265 - cal	AD	272	1685 - 1679	ca1BP	6.8		
						2 $\sigma$	cal	AD	350 - cal	AD	404	1600 - 1547	ca1BP		
9	モモ	AAA (1K)	1720±20 (1722±20)	-28.31 ±0.21	$\sigma$	cal	AD	258 - cal	AD	280	1692 - 1670	ca1BP	21.6	YU- 17050	pa1- 14397
						cal	AD	331 - cal	AD	379	1619 - 1572	ca1BP	46.7		
						2 $\sigma$	cal	AD	252 - cal	AD	290	1698 - 1661	ca1BP		
							cal	AD	321 - cal	AD	407	1629 - 1544	ca1BP	67.0	

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として90年前であることを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 $\sigma$  (測定値の68.2%が入る範囲) を年代値に換算した値。

4) AAAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。

5) 暦年の計算には、OxCal v4.4を使用。

6) 校正データセットは、IntCal20を使用。

7) 校正曲線や校正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

8) 統計的に真の値が入る確率は、 $\sigma$ が68.2%、2 $\sigma$ が95.4%である。

## 引用文献

- Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51, 337-360.
- 金原正明, 1996, 古代モモの形態と品種. *考古学ジャーナル*, 409, 15-19.
- 金原正明, 2015, 考古資料からみたモモとウメ, アンズ. 第10回九州古代種子研究会熊本大会発表要旨集, 九州古代種子研究会事務局, 73-78.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2010, 日本植物種子図鑑(2010年改訂版). 東北大学出版会, 678p.
- 那須浩郎, 2014, 古代のモモ. *BIOSTORY*, vol. 22, 58-61.
- Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J., Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buengen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S., 2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62, 1-33.
- 佐竹義輔・原 寛・亘理俊次・富成忠夫編, 1989, 日本の野生植物 木本1. 平凡社, 321p.
- Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. *Radiocarbon*, 19, 355-363.
- 鈴木康夫・高橋 冬・安延尚文, 2018, 草木の種子と果実—形態や大きさが一日でわかる734種 増補改訂—, *ネイチャーウォッチングガイドブック*, 誠文堂新光社, 303p.

图26 毛毛核



## 第7章 古墳時代前期の顔戸遺跡群—本遺跡出土遺物の検討を中心として—

国立歴史民俗博物館

助教 山下 優介

## はじめに

米原市の南西部にあたる旧近江町域に位置する顔戸遺跡群は、今回調査を実施した長門寺遺跡・顔戸遺跡・高溝遺跡を含み、過去の複数回にわたる発掘調査でも数多くの遺構や遺物が確認されている。それらのなかでも、本節では古墳時代前期の資料に注目し、今回出土した土師器の年代的位置づけに関する議論を基礎として、顔戸遺跡群の変遷を論じてみたい。変遷を論じるにあたって、古墳時代前期とその前段階の弥生時代後期をおもな対象とする。

## 1. 顔戸遺跡出土土師器

本報告資料のうち、古墳時代前期に属する土師器について、その年代的位置づけを検討する。第3章で報告した長門寺遺跡第3次調査では、当該期の土器は小片のみであり図化できるものはなかったため、顔戸遺跡第3次調査ならびに高溝遺跡第4次調査出土資料に関して論じることとする。

顔戸遺跡では、S11やS11に関連したピット、あるいはSD1から器種や器形などの特徴が明らか土師器が出土した。SD1から出土した土師器には古墳時代前期の受口甕が含まれるが、他の高杯をみるかぎり古墳時代中期の土師器を多く含む資料である。したがって、本節ではS11に関連する遺物について述べる。

S11とS11内のP9からは、受口状口縁甕（以下、受口甕）の口縁部片が3点と、底径が約10cmの平底の底部が出土している。底部は壺の可能性が高い。図27-1～3は施文をもたない受口甕である。このような無文の受口甕の所属時期を絞り込むことはやや難しいが、筆者編年のⅧ期（山下2020）、布留式古段路新相（西村2008）に並行する時期に位置づけておきたい。口縁部の屈曲具合や口縁端部を外方へつまみ出す特徴が類似した1・2と、3は形状が異なるが、受口甕が無文化する時期は複數系統の甕の影響を受けて多様な受口甕がつけられる時期であり、口縁部の形状を根拠に詳細な時期を定めることが困難である。地理的に北陸地方や東海地方の土器の影響が色濃く反映される米原市域では、その傾向が一層強く、受口甕による時期の細別を難しくしている。

## 2. 高溝遺跡出土土師器

第5章で報告された高溝遺跡出土土師器は、試掘調査で出土したものも含め、いずれも沼跡から出土したものである。したがってこれらの土師器の年代的位置づけはあくまで沼が存在した時期の一点を示すに過ぎない。しかし、それらのなかにも、遺跡の変遷を考えるうえで重要な時間的な上限や下限、あるいは中心時期を示すであろう資料が含まれているため、それらについて簡単に述べていく。

報告された土器のうち、弥生時代後期から古墳時代前期という時間幅のなかでも最も古い時期に位置づけられるのは口縁部の側面に施文をもつ受口甕や受口鉢である。図28-1～3は櫛歯状工具や木口状工具によるとみられる刺突列点文やヤザミが施されている。

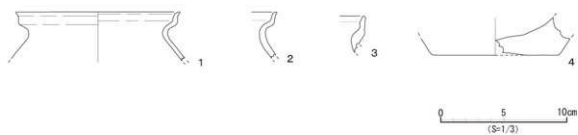


图 27 黒戸遺跡（Ⅰ区）出土遺物

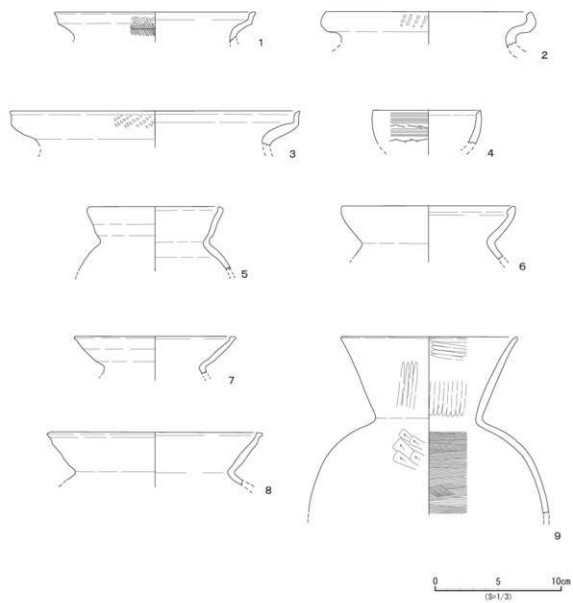


图 28 高瀬遺跡 出土土師器

いずれも口縁部の小片であるため所属時期を限定することはできないが、口縁部が無文の受口甕が主体的になる筆者編年のⅥ期より古い時期であり、庄内式並行期以前といえるだろう。

図28-4は、外面に多条沈線文や山形文が施される小形の椀形高杯である。濃尾平野やその周辺地域で採用され、近江地域にも類例が存在する。4の山形文は板状などの工具の端部で施されているとみられ、位置がずれているために部分的に山形を描けていない箇所がある。近江地域での類例が乏しいため、4を年代的に位置づけることには躊躇するが、筆者編年のⅤ期、庄内式中段階から新段階（西村前掲）を中心とする時期に属すると考えられる。

口縁端部を肥厚させたいわゆる布留形甕（図28-5～8）を中心とする一群は、別時代の資料に比べて豊富に出土しており、沼跡出土土器の主体を占めるといえる。布留形甕の口縁端部の形状をみると、肥厚させた端部の上端が内傾するものが多いことや後出的な要素をもつ個体が多いといえるが、筆者編年のⅦ期、布留式中段階（西村前掲）におおむね並行する時期に属する資料ととらえられる。

図28-9の直口壺は、口縁部から頸部の内外面をミガキによって仕上げる精製品であり、この資料を単独でみたならば筆者編年のⅦ期にみられる直口壺の器形や調整の特徴がよく表れた例と評価できる。出土資料に含まれる無文の受口甕は、上記の布留形甕と同じ時期、あるいはⅦ期に属すると理解してよいだろう。

ここで、高溝遺跡の沼跡から出土したモモ核の放射性炭素年代測定の結果にふれつつ、出土土器の暦年代について考えてみたい。9点のモモ核を対象に放射性炭素年代測定をおこなった結果、いずれの試料も<sup>14</sup>CBP値が1765±20～1700±20の間に入り、年代的に近接していることが示された。第6章図25が示すように、確率分布が示す年代にはやや幅があるが、沼跡出土土器の主体を占める土器の時期を加味すれば、これらのモモ核の多くは4世紀中頃～後半の暦年代に属すると考えることが妥当だと考えられる。また、試料のうちNo.7のモモ核はほかの試料よりやや古く、4世紀前半頃の年代が出ているが、上述のように、主体を占める土器の前段階の資料が少量認められることと整合的な結果ととらえられる。

本報告の年代測定に関連する研究として、代表的なものに奈良県桜井市の遺跡出土資料を対象とした分析（春成他2011）がある。春成他（2011）では、瀬向古墳群や瀬向遺跡群などから出土した木材・種実・土器付着炭化物の放射性炭素年代測定を実施し、測定値を日本産樹木の放射性炭素年代に基づいて較正することで、弥生時代後期から古墳時代前期、特に古墳出現期の暦年代を得ようと試みられた。布留式中段階の資料に関しては測定数が少ないものの、上之庄遺跡の「布留2」式とされる土器の土器付着炭化物と、同時期に属するとされるモモ核の測定が行われ、2点の土器付着炭化物は<sup>14</sup>CBP値が「1770±20」と「1775±15」、モモ核は「1710±15」であった。本報告の測定値に近い値が得られているといえよう。

放射性炭素年代測定の結果と土器の暦年代の対応関係については、分析の蓄積を俟って議論する余地が十分にあるが、高溝遺跡沼跡出土土器の所属時期の中心は、既往の年代観からみても大きく矛盾しない4世紀中頃～後半にあると理解することが妥当であろう。

### 3. 顔戸遺跡群の変遷

以上に論じた出土土器の年代的位置づけをふまえ、ここからは顔戸遺跡群および周辺遺跡の変遷を弥生時代後期から古墳時代前期を中心に論じてみたい。このテーマに関して最新の知見に基づいて論じる必要があるが、顔戸遺跡群とその周辺を対象とした発掘調査は、本報告でも述べているように1980年代から90年代前半にかけて広い面積が調査され、それ以降は小規模な調査が実施されてきた。したがって、2000年代以降に重要な新発見が得られていない現状では、90年代に論じられた遺跡の変遷観（宮崎1994）をおおむね首肯できると考えられ

る。そのような立場から筆者は、宮崎（1994）を基礎としながら本調査の知見を加えて顔戸遺跡群について論じることとする。

顔戸遺跡群の変遷を論じるうえで初めにふれなければならないのは、高溝遺跡の北側に隣接して展開する、法勝寺遺跡群の弥生時代の遺構や遺物である。遺跡群は、法勝寺遺跡・孤塚遺跡・礎遺跡・奥松戸遺跡からなる。孤塚遺跡は、帆立貝形古墳である孤塚5号墳や円墳群が著名な遺跡であるが、法勝寺遺跡群の広い範囲にわたって弥生時代中期から古墳時代初期にかけての方形周溝墓が100基前後確認されている。

法勝寺遺跡をみると、弥生時代中期中葉から方形周溝墓の造営が開始され、中期後葉にかけて造営が活発化する。その後、後期初頭に方形周溝墓の空白期を経て、後期後葉以降に造営が再開され、筆者編年のV期に相当する時期まで続くという変遷観が示されている（宮崎1990b・1994）。このような変遷の背景として、後期初頭に発生した自然災害による遺構の埋没を推定している点（宮崎前掲）は非常に興味深い。弥生時代後期後葉以降の方形周溝墓は、法勝寺遺跡第4次調査区にあたる法勝寺遺跡の南側や、顔戸遺跡群の南側に位置する長門寺遺跡の第1次調査区を中心に確認されている。

法勝寺遺跡で方形周溝墓群が衰退する頃には、法勝寺遺跡群の西側に広がる礎遺跡でも溝跡などの遺構が認められているが、この頃から顔戸遺跡群が大きく発展していく。顔戸遺跡三反田地区で検出された大溝SD01からは、弥生時代後期後葉～古墳時代前期の土師器が数多く出土しており、法勝寺遺跡群で目立たなかった古墳時代前期の資料が豊富である点が注目できる。この傾向は高溝遺跡でも同様である。

高溝遺跡大井地区で検出された「大溝」は、その位置関係や規模から上記のSD01に関連した遺構であると考えられるが、報告書掲載遺物をみればざりでは壺や高杯などに装飾が残る例が多く、SD01より年代的に古相の土器が多く含まれる。このことは顔戸遺跡群内の集落変遷を考えるうえで重要な知見であるが、依然として遺物を伴う堅穴建物などの資料不足は否めず議論を深めることは難しい。銅鏝や小形仿製鏡といった青銅製品が高溝遺跡大溝から出土していることも、遺跡群内の変遷を理解するうえで示唆的である。

顔戸遺跡では、SD01より東側に位置する地点の調査で堅穴建物跡が検出されているが、当時の報告では所属時期について明言されていなかった（近江町教育委員会1991）。本報告第4章に述べたとおり既往の調査地点と本報告の地点は隣接しており、堅穴建物跡の主軸方向が同じであることもふまれば、既往調査と本調査の堅穴建物跡は同時期に属すると考えられる。堅穴建物と大溝の位置関係などから、大溝に対して、微高地上の集落をとり囲む古墳時代の「環濠」としての可能性が指摘されているが（宮崎1990aなど）、その後の調査で集落域の全体像がみえていない現状では、集落と大溝との関係性について積極的に論じることは控えたい。

また、顔戸遺跡群における集落の展開を論じるにあたって注目すべき遺跡に、顔戸遺跡から南西方向に約0.5km離れ、現在の天野川の右岸に位置する黒田遺跡がある。黒田遺跡では、多量の土器・焼土塊・木製品・モモ核が出土したSX01や独立棟持柱建物SB02が検出され、モモ核や木製品の出土状況などからSX01は祭祀的な利用が推定されている。SB02のような独立棟持柱建物も特別な用途が推定されることが多い遺構である。SB02の隣には、布摺り掘り方をもつ掘立柱建物SB03が主軸を同じくして検出されている。これらの遺構は出土土器から顔戸遺跡の堅穴建物と同様なⅧ期に属すると考えられる。顔戸遺跡群は、本調査の出土資料が示すように、古墳時代前期後半頃から一時的に衰退し、その後は中期後半頃に再び展開するようである。古墳時代前期における最盛期の様子が黒田遺跡の棟持柱建物や祭祀土坑に表れていると理解できるだろう。

ここまで、法勝寺遺跡群の状況にもふれながら顔戸遺跡群の変遷を概略的に論じてきた。最後に、近年の近江地域を対象とした集落研究の視点から両遺跡群の変遷をみてみたい。近江地域の集落研究について研究史を詳細に語ることは本節の目的ではないため、ここでは近年の成果にしばって論じることとする。



2000年代までの発掘調査成果を集約することで、近畿地方を中心とした各地の集落変化の内容が明らかにされ、近江地域でも湖東・湖南地域の集落動態が検討された（戸塚 2016・古代学研究会編 2016）。ここでは、弥生時代中期後半と後期前半の両期と、後期前半と後半の間の両期が集落動態上の大きな両期のうちのひとつとしてとらえられ、前者が「拠点集落」の縮小や新興集落の出現を、後者が集落の再編成を伴うと評価されている。その後、近江地域の北半部もふまえた検討でもその傾向は追認され、建物数や周溝墓数が急増するのは具体的に弥生時代後期後葉であることが示された（荒木他 2022）。

実証的なデータを提示した検討が不十分ではあるものの、法勝寺遺跡群にみられた後期初頭の空白期と、高溝遺跡の大溝の形成時期はこれらの両期に整合する可能性が高い。特に、弥生時代後期初頭の衰退の問題は近年再び活発な議論を呼んでいるため、その状況を明確に観察できる米原市域の遺跡群の変遷を再検討する意義は大きいだらう。

### おわりに

おわりに今回の調査で確認された遺構や遺物は決して多くないが、顔戸遺跡の堅穴建物跡の検出例を増やし、それらの所属時期を古墳時代前期前半と推定しうる土器が出土している点において重要な成果が得られたといえる。この成果によって、これまでは大溝のみから推測するほかなかった顔戸遺跡群の集落域の様相が、着実に明らかになった。

顔戸遺跡群の実態解明に向けては今後も新知見の獲得が不可欠であるが、周辺地域の集落変化の傾向と比較検討することで、法勝寺遺跡群から顔戸遺跡群の変遷過程を類推的に論じられる可能性がある。本節で若干ふれたような近年の集落動態研究の成果をふまえた再検討が必要になるだろう。ただし、そのような集落動態の再検討に取り組むためには、本節のように時期に限った検討では不十分であり、少なくとも弥生時代から古墳時代全体にかけて変遷を把握する必要があった。長門寺遺跡で古墳時代中期の遺物が集中して出土したが、それらをふまえて顔戸遺跡群を評価できなかったことは本節の課題である。

### 注

- (1) 宮崎は法勝寺遺跡第3次調査区内の方形周溝墓を、その構造や規模、配列に基づいてAからDの4つのグループに分け、その変遷を論じている。この分類の根拠には、上に挙げた要素以外にも構築時期や位置、重複関係などが複合的に考慮されていたことが窺えるが、自然災害による遺構の埋没が確認されたA・Bグループの方形周溝墓が埋没後、視認できなくなった箇所にC・Dグループが形成されるという変遷観が示されている（宮崎 1996）。先行する墓に対して異なる主軸をもつ墓が重複して構築される法勝寺遺跡の状況や、弥生時代中期後葉の遺構の埋没後に重複して後期の遺構が形成される類型が総貫原内に複数存在するといった事実に基づいた推論の蓋然性について、筆者は十分に肯定できると考えている。しかし、法勝寺遺跡の方形周溝墓の埋没状況については詳細な情報が記載されているとはいえ、「自然災害」による遺構の埋没という見解については検証が難しい。そのため、法勝寺遺跡における方形周溝墓造営の両期が生じた原因については、今後の新知見を俟って妥当性を判断したい。

### 参考文献

- 荒木 幸治・伊藤 淳史・桐井 理揮・清水 邦彦・瀬谷 今日子・戸塚 洋輔・中居 和志・田中 元浩・三好 立・森岡 秀人・山本 亮・渡邊 誠 2022 「弥生後期社会の実像—集落構造と地域社会—」『古代学研究』233、古代学研究会 pp. 3-28

- 近江町教育委員会 1990『高溝遺跡』近江町文化財調査報告書4
- 近江町教育委員会 1991『塚塚遺跡』近江町文化財調査報告書8
- 近江町教育委員会 1994『黒田遺跡3』近江町文化財調査報告書17
- 古代学研究会編 2016『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』六一書房
- 戸塚 洋輔 2016「近江地域」古代学研究会編『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』六一書房, pp.101-130
- 西村 歩 2008「中河内地域の古式土器編年と諸問題」『シンポジウム『邪馬台国時代の摂津・河内・和泉と大和』資料集』香芝市教育委員会, pp.1-42
- 春成 秀重・小林 謙一・坂本 徳・今村 肇雄・尾崎 大真・藤尾 慎一郎・西本 豊弘 2011「古墳出現期の沢東14年代測定」『国立歴史民俗博物館研究報告』163, pp.133-176
- 宮崎 幹也 1990a「第6章 まとめ」『瀬戸遺跡』近江町文化財調査報告書5、近江町教育委員会, pp.30-31
- 宮崎 幹也 1990b「第6章 まとめ」『法勝寺遺跡』近江町文化財調査報告書6、近江町教育委員会, pp.63-68
- 宮崎 幹也 1994「黒田遺跡を取り巻く土器編年」『黒田遺跡3』近江町文化財調査報告書17、近江町教育委員会, pp.58-86
- 森岡 秀人・西村 歩編 2006『古式土器の年代学』大阪府文化財センター
- 山下 優介 2020「近江地域北部の弥生時代後期から古墳時代前期の土器編年—器台形土器を中心とした検討—」『東京大学考古学研究室研究紀要』33, pp.121-153

## 第8章 総括

## 第1節 長門寺遺跡

長門寺遺跡は、第1次調査において上層で井戸跡と推測される土坑1基、下層で弥生時代後期後葉の方形周溝墓3基が確認され<sup>(a)</sup>。また第2次調査では、6世紀後半の溝が検出されている<sup>(b)</sup>。

今回の調査では、主な遺構として方形周溝状の溝2条(SD1~2)と土坑1基(SK1)、沼跡を確認した。SD1~2は一部のみ検出され、調査区西側の水田の下へと続いている可能性がある。供献土器が伴わなかったため、方形周溝墓と断定はできないものの、第1次調査で確認された方形周溝墓と隣接し、かつ方位軸が揃うことから、同じ群に属する可能性が高い。

また沼跡について、本調査では遺物が出土せず、詳細な存続年代は不明である。しかし、試掘調査において沼跡からビニール袋などが出土していること、沼跡の汀線上に近現代に打たれたとみられる杭列が残存していたことから、近現代まで存在していた可能性がある。なお、上記遺構のほかに104基のピットを検出したが、そのうちの1基でかわらけが出土したほかは遺物の出土はなく、建物も復元できなかった。

今回、出土した遺物のほとんどがSK1から出土しており、TK73~TK47併行期の須恵器と宇田I式の甕など5世紀前半から後半にかけての遺物が一括で出土した。これらの遺物のほかに土師器の甕・甔が共存しており、この地域の土師器の年代を検討する上で良好な一括資料と言えるだろう。

これまで近江町教育委員会や京都大学、大手前大学などにより息長古墳群の調査が行われ<sup>(c)</sup>、古墳時代前期後葉から後期にかけてのこの地域における古墳の様相が明らかにされてきた一方で、同時期の集落の動態については詳細が不明であった。今回の調査で、長門寺遺跡のSK1から5世紀前半から後半にかけての遺物が一括で出土し、さらに、長門寺遺跡第2次調査において6世紀後半と推測される溝が検出され、近接する亀塚遺跡においても6世紀後半の遺物が出土していることから、5世紀前半から6世紀後半にかけて長門寺遺跡周辺に集落が存在していた可能性が考えられる。

## 第2節 顔戸遺跡

顔戸遺跡は、第1次調査において南北方向に延びる大溝遺構が検出されると共に、その東側で古墳時代の集落遺構が検出されている<sup>(a)</sup>。また、第1次調査地の南側で実施された第2次調査において、東西方向に延びる溝および古墳時代の竪穴建物1基が確認されている<sup>(b)</sup>。

今回の調査では、主な遺構として竪穴建物1基(SI1)と溝3条(SD1~3)を確認した。SI1は、第2次調査で検出された竪穴建物と隣接すると共に、同じく南北方向に方位軸が揃うことから、同時期に併存していたとみられ、この集落を構成する建物の一つと考えられる。遺構の年代観について、SD2から出土した土師器に古墳時代前期の受口状口縁を持つ甕が含まれるものの、SI1およびSD2から出土した土師器の多くは、山下福年のⅦ期、西村福年の布留式古段階新相段階のものであることから、これらの遺構の所属年代は、古墳時代前期に位置付けられる<sup>(c)</sup>。

既往の調査により、古墳時代の明確な建物遺構として掘立柱建物および竪穴建物が確認されていたが、従来想定されていた集落範囲の南側において竪穴建物が確認されたことで、古墳時代の集落の広がりが従来の想定より南西に延びていたことが明らかとなった。

### 第3節 高溝遺跡

高溝遺跡は、第1次調査において縄文時代の遺物包含層のほか、古墳時代の大溝遺構、平安時代の掘立柱建物などが検出されている<sup>(9)</sup>。この調査により縄文時代以降、弥生時代末から古墳時代中期に至るまで、この場所に集落が営まれていたことが明らかとなった。また古墳時代の大溝は、平安時代後期までの条里開発によって埋められたと推測されている。第2次調査では、掘立柱建物、条里畦畔、大溝遺構が検出されている<sup>(10)</sup>。第3次調査では、溝1条と土坑2基、柱穴1基が検出されているが、調査面積が限られること、年代がわかる遺物が出土していないことから遺構の性格は不明である<sup>(11)</sup>。

今回の調査において、主な遺構として沼跡およびピット3基を確認した。沼跡からは、弥生時代から古墳時代初頭にかけての土師器、古墳時代の須恵器のほか、縄文土器、布目痕を持つ平瓦などが出土した。調査地の東側は微高地となっており、沼跡の東側に遺物の分布が集中していたことから、この微高地で集落が営まれ、そこから沼に土器が投棄されていたとみられる。

そのほか、沼跡からは種子類が大量に出土した。出土した種子類について、種子同定および炭素年代測定法による分析を行った結果、4世紀半ばのモモ核であることが明らかとなった。このモモの性格について、①食用としてこの地域でモモが栽培されていた可能性、②食用としてほかの地域から搬入された可能性、③観賞用の桃木がこの沼の近くに植えられていた可能性の3通りの可能性が考えられ、今回出土したモモの性格および産地については、将来的にはDNA鑑定などの分析により明らかになるだろうと考えている<sup>(12)</sup>。

また試掘調査により、本調査地の北側に位置するT14～15においても沼の堆積を確認した。この沼からは遺物が出土せず存続年代は不明で、本調査で検出された沼と一連の沼からは今後の検証が必要ではあるものの、この地点で沼の堆積が確認されたことにより、現在高溝集落がある微高地の西側には沼沢地が広がっていた可能性が想定される。

出土した土器とモモ核の分析結果を踏まえて考察すると、4世紀中頃から6世紀後半にかけて、この沼の周辺において集落が営まれたが、古代に入ると沼は埋められ、後にその場所に建物建てられたことが明らかとなった。今回の調査により、この地域における土地利用の変遷の一端を明らかにすることができたと考える。

### 第4節 おわりに

ここまで、市道顔戸・八田羽織線道路改良工事に伴う長門寺遺跡、顔戸遺跡、高溝遺跡の発掘調査について説明を加えてきたが、最後に顔戸遺跡群の将来の調査課題を3点提示して締めくくりたい。

第1は、長門寺遺跡で検出された方形周溝墓群の年代・規模の確認である。

長門寺遺跡では、弥生時代後期後葉以降に方形周溝墓が築かれ始めたこととみられ、第1次調査で3基、今回の調査で方形周溝状の溝が2条確認された。これらは隣接すること、方位軸が揃うことなどから、おそらく同一の群に所属するとみられ、この群の年代、規模を確認する必要がある。また、今回検出された沼が方形周溝墓が築かれた段階で存在していたのか、当時の周辺環境の解明も今後の課題であろう。

第2は、大溝遺構の性格の解明である。

大溝遺構は、顔戸遺跡「三反田地区」および高溝遺跡「高溝大井地区」で検出されており、環濠集落の可能性が指摘されていた<sup>(13)</sup>。しかし、大溝遺構は集落跡の西側および北側で確認されているものの、環濠集落と位置付けるには南側および東側で大溝遺構の確認が必要である。また顔戸遺跡「三反田地区」において、大溝遺構で堰状遺構が検出されたほか、高溝遺跡では「小型仿製鏡」とミニチュア土器が出土し、周辺で祭祀が行われていた可能性があることから、自然河川もしくは人工の農業用水路である可能性も検討する必要があるだろう。

第3に、古墳時代中期から後期にかけての集落動態の把握である。

この地域では、古墳時代前期後葉の定納古墳群から後期前半の山津照神社古墳に至るまで古墳が築かれたが、集落については、黒田遺跡、碓遺跡、高溝遺跡において古墳時代前期の集落が確認されている一方で、古墳時代中期以降の集落の動態について不明であった。しかし、長門寺遺跡第2次調査、亀塚遺跡の調査において6世紀後半の遺構・遺物が出土したことに加え、今回長門寺遺跡から古墳時代中期の遺物がまぎらわしく出土したことにより、長門寺遺跡周辺に古墳時代中期から後期にかけて集落が存在した可能性が高まった。しかし、同時期の明確な建物遺構が検出されていないことから、どのような集落であったのか詳細は不明であり、今後この集落の様相、広がりを確認する必要があるだろう。

今回提示した調査課題が将来的に、この地域の地域史解明の糸口になることを望む次第である。

#### 注

- 1) 宮崎 幹也 1995『近江町埋蔵文化財調査集報1 国庫補助事業「町内遺跡発掘調査」報告書』（近江町文化財調査報告書第18集）、近江町教育委員会。
- 2) 宮崎 幹也 2001『近江町埋蔵文化財調査集報3 町内遺跡発掘調査報告書』（近江町文化財調査報告書第21集）、近江町教育委員会。
- 3) 小野山 節ほか1995『琵琶湖周辺の6世紀を探る』（平成6年度科学研究費補助金一般研究B調査研究成果報告書）、京大文学部考古学研究室。  
宮崎 幹也 1991『塚の越古墳』（近江町文化財調査報告書第10集）、近江町教育委員会。  
宮崎 幹也 1995『近江町埋蔵文化財調査集報1 国庫補助事業「町内遺跡発掘調査」報告書』（近江町文化財調査報告書第18集）、近江町教育委員会。  
宮崎 幹也 1996『近江町埋蔵文化財調査集報2 孤塚遺跡発掘調査報告書』（近江町文化財調査報告書第19集）、近江町教育委員会。  
宮崎 幹也 2000『息長古墳群1 遺跡詳細分布調査報告書』（近江町文化財調査報告書第20集）、近江町教育委員会。  
宮崎 幹也ほか2005『定納古墳群』（大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター調査報告書）、大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター・近江町教育委員会。  
吉田 秀樹・田中 勝弘 1987『一般国道8号（長浜バイパス）関連遺跡発掘調査報告書IV 孤塚遺跡』、滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会。
- 4) 宮崎 幹也 1990『顔戸遺跡』（近江町文化財調査報告書第5集）、近江町教育委員会。
- 5) 宮崎 幹也 1990『埋蔵遺跡』（近江町文化財調査報告書第8集）、近江町教育委員会。
- 6) 西村 歩 2008『中河内地域の古式土器編年と諸問題』、『シンポジウム『邪馬台国時代の摂津・河内・和泉と大和』資料集』香芝市教育委員会。  
山下 優介 2010『近江地域北部の弥生時代後期から古墳時代前期の土器編年—器台形土器を中心とした検討—』、『東京大学考古学研究室研究紀要第33号』、東京大学考古学研究室。
- 7) 宮崎 幹也 1990『高溝遺跡』（近江町文化財調査報告書第4集）、近江町教育委員会。
- 8) 註5参照。
- 9) 註2参照。
- 10) 今回出土したモモ核は後世の分析に備えて、一般的な保存方法である薬剤（エタノールなど）による保存処理を行わず、数か月かけてゆっくりと自然乾燥させる方法により保存処理を行った。
- 11) 註5参照。

图 版





1 長門寺遺跡  
調査前風景 北東から



2 長門寺遺跡  
遺構検出状況 南から



3 長門寺遺跡  
遺構検出状況 北から



PL. 2



長門寺遺跡

1 長門寺遺跡

SD1 検出状況 東から



2 長門寺遺跡

SD1 土層断面 西から



3 長門寺遺跡

SD2 土層断面 南から

1 長門寺遺跡  
S03 土層断面 西から



2 長門寺遺跡  
SK1 土層断面 西から



3 長門寺遺跡  
SK1 遺物出土状況 北から



PL. 4



長門寺遺跡

1 長門寺遺跡  
遺構完照状況 南から



2 長門寺遺跡  
遺構完照状況 北から



3 長門寺遺跡  
SDI 完照状況 東から





10



16



20



21



3



11



12



13



14



15



17



18



19



PL. 8

熊戸遺跡



1 熊戸遺跡（1区）  
調査前風景 南西から



2 熊戸遺跡（1区）  
遺構検出状況 南から



3 熊戸遺跡（1区）  
調査区南壁土層断面 北から

熊戸遺跡

PL. 9



1 熊戸遺跡（I区）  
S11検出状況 南東から



2 熊戸遺跡（I区）  
S11土層断面 北東から



3 熊戸遺跡（I区）  
S11土層断面 西から





1 願戸遺跡（1区）  
遺構完備状況 北から



2 願戸遺跡（1区）  
S11完備状況 東から



3 願戸遺跡（1区）  
S11 出土遺物

- 1 願戸遺跡（Ⅱ区）  
調査前状況 南から



- 2 願戸遺跡（Ⅱ区）  
遺構検出状況 南から



- 3 願戸遺跡（Ⅱ区）  
遺構検出状況 北西から



PL 12



顔戸遺跡

1 顔戸遺跡（Ⅱ区）

SD 2～3 棟出状況 南東から



2 顔戸遺跡（Ⅱ区）

SD 2土層断面 南東から



3 顔戸遺跡（Ⅱ区）

SD 3土層断面 西から

1 顔戸遺跡（Ⅱ区）  
遺構完照状況 南から



2 顔戸遺跡（Ⅱ区）  
遺構完照状況 北から



3 顔戸遺跡（Ⅱ区）  
遺構完照状況 北西から





1 熊戸遺跡（Ⅱ区）  
S D 1 完掘状況 南東から



2 熊戸遺跡（Ⅱ区）  
出土遺物



3 熊戸遺跡（Ⅱ区）  
出土遺物

1 高溝遺跡

調査前状況 北東から



2 高溝遺跡

遺構検出状況 南から



3 高溝遺跡

沼跡 遺物出土状況 東から



PL 16



高溝遺跡

1 高溝遺跡  
遺構完備状況 南から



2 高溝遺跡  
トレンチ東壁断面 南西から



3 高溝遺跡  
試掘調査 出土遺物



1 高溝遺跡

沼跡 出土遺物



2 高溝遺跡

沼跡 出土遺物



3 高溝遺跡

沼跡 出土遺物





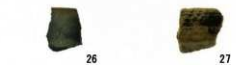
25

1 高溝遺跡  
沼跡 出土遺物



23

24



26

27

2 高溝遺跡  
沼跡 出土遺物



28

29

30

31

36

37

3 高溝遺跡  
沼跡 出土遺物

1 高溝遺跡  
沼跡 出土遺物



2 高溝遺跡  
沼跡 出土遺物



3 高溝遺跡  
沼跡 出土遺物



報告書抄録

ふりがな	ちようもんじいせき・ごうどいせき・たかみぞいせきはつくつちようさほうこくしょ							
書名	長門寺遺跡・顔戸遺跡・高溝遺跡発掘調査報告書							
副書名	市道顔戸・八田羽織線道路改良工事に伴う発掘調査							
シリーズ・番号	米原市埋蔵文化財調査報告書 第6集							
編著者名	石田 雄士(編) 山下 優介 松原 草太 滝木 時玄 幸田 朱加							
編集機関	米原市教育委員会							
発行機関	米原市教育委員会							
所在地	〒521-8501 滋賀県米原市米原1016番地 TEL 0749-53-5154 FAX 0749-53-5129							
発行年月日	2024年3月29日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長門寺遺跡	滋賀県米原市 顔戸	252140	464 -020	35° 20′ 20″	136° 18′ 03″	2019年7月9日 ～9月26日	280㎡	市道顔戸・八田羽織線道路改良工事
顔戸遺跡	滋賀県米原市 顔戸	252140	464 -018	35° 20′ 28″	136° 17′ 56″	I区:2020年11月9日 ～11月18日 II区:2021年10月21日 ～11月5日	92.41㎡	市道顔戸・八田羽織線道路改良工事
高溝遺跡	滋賀県米原市 高溝・顔戸	252140	464 -004	35° 20′ 38″	136° 17′ 54″	2022年5月10日 ～6月13日	84.75㎡	市道顔戸・八田羽織線道路改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長門寺遺跡	集落跡・社寺跡	弥生・中世	溝4条、土坑1基、ピット104基、沼跡	土師器・須恵器・かわらけ		方形周溝墓状の溝2条および古墳時代の土坑1基を確認。土坑から古墳時代の土師器・須恵器が一括出土。		
顔戸遺跡	集落跡	縄文～古墳	竪穴建物1基、溝3条、ピット14基	土師器・須恵器		古墳時代中期の竪穴建物1基と溝を2条確認。		
高溝遺跡	集落跡	縄文～古代(平安)	沼跡、ピット3基	土師器・モモ核・瓦		古墳時代前期から古代にかけて存続したとみられる沼跡を検出。そのほか、沼跡からは同時期のモモ核が21点出土。		

米原市埋蔵文化財調査報告書 第6集  
長門寺遺跡・顔戸遺跡・高溝遺跡発掘調査報告書  
—市道顔戸・八田羽織線道路改良工事に伴う発掘調査—  
2024年3月29日発行

編集・発行

米原市教育委員会

〒521-8501 滋賀県米原市米原1016番地

TEL 0749-53-5154 FAX 0749-53-5129

印刷・製本

立木印刷

〒521-0035 滋賀県米原市醜井478番地1

TEL 0749-54-2662 FAX 0749-54-2923

